

国立民族学博物館調査報告 7

「金書」研究への序説

楊 海 英

国立民族学博物館

1998

目次

1	歴史としての「金書」	1
1.1	オルドスとチンギス・ハーン祭祀	1
1.2	八白宮に源流をもつ年代記	3
1.3	伝統文化の維持とその公開	4
1.4	「金書」の内容と祭祀者ダルハトの見解	7
2	「金書」の伝播	10
2.1	ケルレン・バラス・ホトの「守護神チンギス・ハーン廟」	10
2.2	リンチンとケルレン・バラス・ホトの文書	13
2.3	ケルレン・バラス・ホトの文書に関する私の調査	15
3	従来の「金書」収集と研究	24
3.1	モスタールトの文書	25
3.2	ジャムツァラーノが収集し、リンチンが公表した文書	30
3.3	文学の視点から「金書」をみたダムディンスレン	37
3.4	ディリコフが書きうつして発表した文書	38
3.5	リンチンみずからがオルドスで収集した文書	40
3.6	キョードーの研究	44
3.7	「金書」の多様性	46
4	本研究であつかう2種類の「金書」	47
4.1	オーノス本「金書」	47
4.2	ウランバートル本「金書」	50
5	「天のことば」で書かれた「天の歌」	52
5.1	「天の歌」に関する従来の研究	52

5.2	リンチンの調査	53
5.3	オーノスの「天のことばによる歌」(Tngri-yin kelen-ü dayun oruşıba)	57
5.4	「天の歌」をいつうたうのか	58
5.5	1992年当時の祭祀状況	63
6	「金書」の書写について	67
6.1	ボショクト・ジノンによる書写	68
6.2	リンチン・ジノンによる書写	71
6.3	康熙61年の書写	72
6.4	ジャミヤン・ジノンによる書写	72
6.5	ジャナガルディ・ジノンによる書写	74
6.6	書写作業における編纂	75
7	歴史への回帰と展望	75
	文 献	77

1 歴史としての「金書」

モンゴルの年代記のなかには、チンギス・ハーン祭祀の起源についてかなり明確な記録がある。それらによると、チンギス・ハーン祭祀は、フビライ・ハーン（在位1260-1294）の治世下あるいはその前後に開始された（Na Ta 1991:29;Sonom 1995:207;Sayinjiryal & Šaraldai 1983:24-26）ことがわかる。一連のチンギス・ハーン祭祀における指針書をモンゴル語で「金書」（Altan Bičig）あるいは「金冊」（Altan Debter）とよぶ。「金書」のなかには、「以前午年より布告し捧げるべき義務これなり」という表現がある。オルドス・モンゴル族には、「午年」とは壬午（1282）年のことであり、チンギス・ハーン祭祀は、フビライ・ハーンの勅命によってはじまったという伝承がある（Sayinjiryal & Šaraldai 1983:25;Narasun & Öljeibayar 1986:181）。

「金書」はチンギス・ハーン祭祀の核心である。そのため、「金書」は機密文書として決して世に公開されることはなかった。チンギス・ハーン祭祀を研究するには、まず「金書」の全容をあきらかにすることから着手する必要がある。本研究では、私が調査できた2種類の「金書」をテキストのかたちで公表する。

2種類の「金書」を私はそれぞれ「オーノス本」と「ウランバートル本」とよぶことにする。「オーノス本」と命名するテキストは、オルドス・モンゴル族出身のオーノス（Oγonos）の提供による。「ウランバートル本」とは、現在モンゴル国の首都ウランバートル市内にある国立中央図書館に所蔵されている文書を指す。この文書は、いつ誰の手によってオルドス地域から持ち出されたのか、明確な情報はない。

1.1 オルドスとチンギス・ハーン祭祀

壬午年よりチンギス・ハーン祭祀を継承したオルドス・モンゴル族は、15世紀末ころから黄河の南に位置する大湾曲地帯に入り、次第に地域集団化の道を歩む。チンギス・ハーン祭祀も主としてこの地でおこなわれるようになる。現在、内蒙古自治区の西部に位置するこの地をオルドス（鄂爾多斯）とよぶ。オルドスは現在、行政組織上内蒙古自治区のイケ・ジョー（伊克昭）盟を形成している。イケ・ジョー盟は7つの旗と1つの市からなっている。盟と旗は清朝時代からの行政組織の名称である。

清朝時代の7旗は、オルドス左翼前旗（ジュンガル旗）、オルドス左翼中旗（ジュンワン旗）、オルドス左翼後旗（ダラト旗）、オルドス右翼前旗（ウーシン旗）、オルドス右翼中旗（オトク旗）、オルドス右翼後旗（ハンギン旗）、オルドス右翼前末旗（ジャ

サク旗)である。このうち、ジャサク旗は1731年にウーシン旗から分離してできたものである。旗は、いずれもモンゴル族固有の父系親族集団 (oboγ) を中心に組織されたものである。民間では、旗内のもっとも中核的な父系親族集団の名称が旗全体の呼称として定着していた。左翼や右翼などのような名称は、あくまでも清朝政府の公式名称で、民間に普及することはなかった。

中華人民共和国時代になってから、清朝時代の左翼や右翼のような公式呼称は廃止され、かわりに父系親族集団名に由来する民間の呼称が採用された。盟・旗という行政組織の名称はのこったが、各旗の領域には若干の変動がおこった。ジャサク旗とジュンワン旗が併合され、新たにエジン・ホロー旗に編成された。1980年、もとのオトク旗はオトク前旗とオトク後旗という2つの旗に分かれた。

1990年現在オルドス地域には14.1万人のモンゴル族と105.5万人の漢族が生活している(『内蒙古大辞典』編纂委員会 1991:49)。伝統的な遊牧生活はすでに完全に消えさった。オルドス・モンゴル族の大半は半農半牧の生活を営んでいる。オルドス地域の新しい住民である漢族のほとんどが、1950年代以降に国家の政策によって移住してきたものである。

オルドスとはオルドの複数形である。オルドとは、本来モンゴル系やチュルク系遊牧社会における君主ハーンの宮帳を指す。ハーンの死後、宮帳は生前の君主を祭る祭殿に変身する。チンギス・ハーンの死後、その遺品を集めて設置された祭殿を「8つの白いオルド」(naiman čayan ordu)とよぶ。漢語の文献には「八白宮」、「八白室」などと記されている。以下、本論文でも便宜のため「八白宮」と表現する。

八白宮の祭祀活動を今日まで維持してきたのは、「五百戸の黄色いダルハト」(tabun jaγun erüke sir-a darqad)と称する特別の祭祀者集団である。八白宮のほか、オルドスにはまたチンギス・ハーンの軍神カラ・スウルデ、モンゴル帝国の国旗チャガン・トゥク(楊 1998)、チンギス・ハーンの末子トロイ・エジンの祭殿(楊 1997a:635-708)、チンギス・ハーンの弟ベルグータイの祭殿、チンギス・ハーン一族の傍系とされるガタギン一族の守護神(arban γurban atay-a tngri)など数多くの祭殿オルドが存在している。これらの祭殿も「白いオルド」とよばれ、それぞれに祭祀者集団がおり、独自の祭祀活動をおこなってきた。オルドス・モンゴル族は、「五百戸の黄色いダルハト」やそのほかの祭祀者集団を中心に形成された部族集団である。

モンゴル族は、一般に北アジアの歴史上の遊牧民がそうであるように、全部属を10進法にもとづいて左右両翼の体制に編成していた。17世紀半ばごろに清朝の支配下に

入るまで、オルドス・モンゴル族はモンゴルの6つの万戸集団のうちの1つ、右翼の「オルドス万戸」(Ordus tümen)を形成していた。右翼3万戸の指導者はジノン(jinung)といい、ジノンはつねにオルドス万戸に駐営していた。ジノンは右翼3万戸を統率するほか、八白宮の祭祀活動における最高監督でもあった。

清朝時代になると、大ハーン存在は認められなくなったが、ジノンという称号は存続しつづけた。ジノンは3つの万戸を統轄する華々しい地位から転落し、1つの万戸からなるイケ・ジョー盟盟長の地位にとどまった。盟長はなんの実権ももたないが、八白宮の祭祀活動に対する監督権は、依然としてジノンにあり、オルドス7旗の旗王たちが順でジノンをつとめた。

1.2 八白宮に源流をもつ年代記

モンゴル語で書かれた年代記には、八白宮を「総合的守護神」(yerüngkei-yin sitügen)とよぶ表現がある。モンゴルの歴代大ハーンは八白宮の前で即位するか、あるいは即位後に参拝することになっていた。チンギス・ハーンの後継者たちは、八白宮にみずからの正統性を求めたのである。今世紀初頭、外モンゴルの諸集団が清朝の崩壊を機に独立した。その際、新しい国家の正統性を確立するため、八白宮を外モンゴルへ移転しようとしたが、はたせなかった。このように八白宮祭祀を維持するオルドス・モンゴル族の動向はつねにモンゴル族全体の政治運営に影響を与えてきた(楊 1997b:1-13)。

オルドス・モンゴル族は、「総合的守護神」である八白宮のもつ意義と、モンゴル族全体におけるみずからの立場を自覚してきた。かれらには、「歴史」を重視する伝統がある。「歴史とは、祖先たちの経験である」という理念にもとづいて、かれらは「歴史を語る」、「歴史を書く」、「歴史書を保存する」ことに執念をもっている。現在においても、2~3人でも集まれば、「歴史」について語りあう。「歴史」を語り、「歴史」を書くことによって自分たちのアイデンティティを確立してきたのである。かれらは、歴代の祖先が13世紀の元朝時代から八白宮の祭祀活動に関わってきた歴史を最大の自負としている。チンギス・ハーン祭祀との関連は、そのままオルドス・モンゴル族の歴史でもある。そのため、かれらは祭祀活動に参加するだけでなく、祭祀に関するさまざまな文書を書きうつし、それを保存してきたのである。

チンギス・ハーンの祭殿八白宮の1つに文書館の白宮(šang-un örgüge čayan ordu)がある。文書館の白宮にはかつて多くの歴史文献と祭祀関係の文書を秘蔵していた。

これらの文献は、オルドス・モンゴル族の知識人たちに巨大な影響を与えつづけてきた。チンギス・ハーン祭祀とオルドス・モンゴル族との特別な結びつきは、数多くの年代記を誕生させた。『十善白史』(Arban Buyantu Nom-un Čayan Teüke)、『シャル・トージ』(Sir-a Turuġi)、『蒙古源流』(Erdeni-yin Tobči)、『スウバート・エリケ』(Subud Erike) など重要な歴史書はいずれもオルドス・モンゴル人が執筆または編纂したものである。ナラソンとウルジバヤルの研究によると、17世紀から20世紀初頭にかけて書かれた数々の年代記の特徴は、いずれも文書館の白宮内の文献資料を利用している点で共通しているという。なかには『スウバート・エリケ』のように、ジノンの指示を受けた人物が祭祀者ダルハトと協力しあって書きあげた年代記もある(Narasun & Ölġeyibayar 1986:217-295)。

オルドス地域における私の一連の調査も、オルドス・モンゴル族とチンギス・ハーン祭祀との歴史的関連性に関する把握からはじまった。かれらは私に「歴史」を語って聞かせ、「歴史」に関する数多くの写本をみせてくれた。今回公開する「金書」の1つ、後述する「オーノス本」とは、オルドス・モンゴル族出身のオーノスの提供によるものである。もう1種のモンゴル国国立中央図書館所蔵の「金書」をはじめ、伝世する「金書」はいずれもオルドス・モンゴル人が書きのこしたものである。

1.3 伝統文化の維持とその公開

1.3.1 「金書」をもとにした『黄金オルドの祭祀』

八白宮祭祀の多くは、古くから「秘密の祭祀」(niγuča tayilγ-a)と位置づけられ、モンゴル族以外は祭祀に参加できなかった。文書館の白宮内に保存してあった歴史文献と祭祀関係の文書も「秘密の書」とされていた。これらの文書を総じて「金書」あるいは「金冊」とよんでいた。「金書」は「秘密の書」とされ、祭祀者ダルハトおよび要職を兼ねるチンギス・ハーン一族の出身者であるタイジ(tayiji)以外の者には、決して公表することはなかった。

1966年から10年間にもおよぶ政治運動「文化大革命」の際、「旧社会の文化を徹底的に破壊する」という目的で、八白宮関連の文書類は、破滅的な打撃を受けた。これには八白宮の1つ文書館の白宮内に秘蔵されていた文書と、祭祀者ダルハト個人の手元にあった文書の両方が含まれる。なかには、貴重な文書を保存しようとして、命を落とした祭祀者もいた。「文化大革命」を経た現在、完全なかたちの「金書」が非常に

少なくなったのは事実である。今日、八白宮祭祀は復活しているものの、祭祀全体における祝詞や祈祷文の使用状況は、まだ完全に「文化大革命」以前の状態に復元されていないのである。したがって、祭祀者のダルハトたちや一般のモンゴル人たちが秘蔵してきた祭祀文書は、歴史上のチンギス・ハーン祭祀を研究するうえで、きわめて価値の高い一次資料である。

政治的な理由で大きな打撃を受けたために、チンギス・ハーン祭祀を「秘密の祭祀」のままで維持することはできなくなってしまった。そうした背景のもとで、1983年にチンギス・ハーン祭祀を綿密に記録した大作、『黄金オルドの祭祀』(Altan Ordun-u Tayilγ-a)が北京の民族出版社から出版されたのである。著者は、オルドスの民族学者サインジャラガル(Sayinjirγal)と祭祀者ダルハトを兼ねるシャラルダイ(Šaraldai)の2人である。

1988年春に八白宮を訪れた小長谷有紀は、祭祀者ダルハトたちがチンギス・ハーン祭祀のもろもろの秘儀をじゅうぶんに伝承できなかったという悔恨から、祭祀を公開したとみている(利光 1989:39)。私は1991年から1992年にかけてオルドス地域で調査をおこない、祭祀者のダルハトたちに八白宮祭祀の歴史的変容についてインタビューをした。それによると、1980年代に入ってから、政治情勢の緩やかな変化にともない、八白宮祭祀も少しずつ復興しはじめた。政治情勢が変化した以上、伝統文化を保存する手段の一環として、従来は決して公表しないことになっていた「秘密の祭祀」と「秘密の書」を世に公開することを祭祀者ダルハトたちが決意したのである。

『黄金オルドの祭祀』は、「金書」をもとにして諸々の儀礼を記述したものである。その際著者は、諸写本を集積し比較している。これらの「金書」は、祭祀者ダルハトが動乱のなかで必死に保存していたものである。もとの写本にあった誤植も、あえて訂正せずに、本来の姿をたもったまま収録している。

「金書」に収録されたさまざまな祈祷文、祝詞類は、祭祀のときに祭祀者ダルハトが唱える。ダルハトはそれらを記憶する必要があった。『黄金オルドの祭祀』の著者は、写本を利用しているだけでなく、実際に祭祀活動に長く従事してきた祭祀者ダルハトの口頭伝承をテキスト化している。この際も、著者は複数のダルハトの記憶に依拠しており、きわめて厳密な学風がうかがえる。

『黄金オルドの祭祀』のもう1つの特徴は、チンギス・ハーン祭祀の諸儀礼を要領よく記述している点である。儀礼の場における文書の使用方法和目的が明記されている。文書と儀礼、いいかえれば指針書「金書」と儀礼との脈絡がはっきりしていることで

ある。本研究では、『黄金オルドの祭祀』以外の文書を分析する際、基本的には『黄金オルドの祭祀』の記述と私自身の調査資料に依拠する方針をとる。

しいて研究者として、『黄金オルドの祭祀』の不備をあげれば、著者にはやはり「金書」全体をテキストのかたちで公表してほしかった点であろう。しかし、これはどうてい無理なことである。『黄金オルドの祭祀』の著者は、民族文化を維持するために、「秘密の儀礼」としてのチンギス・ハーン祭祀を公表したのである。テキストよりも儀礼そのものの公開に意義があったのである。そのため、儀礼のコンテキストのなかで「金書」の一部をテキストとしてあつかうのは当然のことであろう。

1.3.2 ナラソンとエルデムトの『成吉思汗八白室』

オルドス地域にある最大の文書館は国立伊克昭盟档案馆である。この伊克昭盟档案馆には清朝初期から中華民国時代までの文書が数多く保存されている。ナラソン(Narasun)とエルデムト(Erdemtü)編纂の『成吉思汗八白室』は、档案馆所蔵の八白宮関連の文書を集めたものである。

『成吉思汗八白室』は7輯からなり、1985年から1987年にかけて伊克昭盟档案馆からガリ版印刷で出版された。文書の時代は乾隆年間(1736-1795)から中華民国期に至る。その文書の採録は、チンギス・ハーンの祭殿八白宮をはじめ、1950年代までオルドス各地にあったさまざまな祭殿におよぶ。祭祀者ダルハトから祭祀の最高監督ジンへ提出した祭祀状況に関する報告、祭祀用品の収集調達、祭祀器具の詳細なリスト、各種祝詞と祈祷文、ダルハトの任命と移動をめぐる人事資料など豊富な内容が収録されている。

『黄金オルドの祭祀』が出版されて以来、オルドス地域での反響はとくに大きかった。私の観察では、ほとんどのモンゴル族家庭に1冊は入っていた¹。編纂者に確認することはできなかったが、『黄金オルドの祭祀』につづいて公表された『成吉思汗八白室』という文書集を編纂し、出版した目的の1つは、『黄金オルドの祭祀』に収録しきれなかった文書類を補足することにあったと私は推測している。『黄金オルドの祭祀』と『成吉思汗八白室』は、チンギス・ハーン祭祀を研究するうえで、双璧的な存在である。

¹民族文化に関する書物を購読し、保存するのまたオルドス・モンゴル族の慣習である。

1.4 「金書」の内容と祭祀者ダルハトの見解

『十善白史』は、チンギス・ハーン祭祀の理論的根拠とされている。サインジャラガルは、『十善白史』のなかにある「黄色い書」(Sir-a Bičig)は、おそらく「金書」のことであろうという(Sayinjiryal 1990:138)。実際、現在でも祭祀者ダルハトたちは、「金書」を「黄色い書」ともよんでいる。

サインジャラガルとシャラルダイによると、「金書」はふだんチンギス・ハーンとその第一夫人ボルテ妃の「遺骨」(čindar)を入れる箱(qaγurčaγ)のなかで保存されていたという。それは長さ120cm、幅77cm、高さ99.5cmの銀製の箱であった(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:15;20)。

サインジャラガルとシャラルダイは『黄金オルドの祭祀』のなかで、同時に何種類もの「金書」を使用し、ふんだんに引用している。かれらは「金書」あるいは「金冊」についての詳しい書誌学的な資料を提供していない。以下では、まず『黄金オルドの祭祀』にみられる「金書」と儀礼との関係を呈示しておきたい。祭祀運営を熟知している祭祀者ダルハトの見解と解釈は、「金書」を研究するうえで欠くことのできない基礎知識である。

1) 祭祀活動を維持するための義務(yeke alba)を収録

「金書」には「以前午年より布告し捧げるべき義務これなり」(erte morin jil-eče tungγan ögkü yosutu alba ene bölüge)とある(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:25)。また「四季大宴の義務」(dörben čaγ-un qurim-un alba)との表現もある(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:25;77;109;113;118-119;145)。これら義務(alba)に関する項目には、儀礼の際に使用されるヒツジの丸煮、乳酒など供物に関する詳細な記録がある。

一部の「金書」には、ハーンやジノンをはじめ、オルドス、ウリヤンハイ、ユンシェープ、チャハル、ハルハ、トゥメトなど、15世紀ころのモンゴル族の6つの万戸集団それぞれの義務を明記しており、清朝時代の要素がまったくない。これらの記述は、北元時代におけるチンギス・ハーン祭祀の一環を物語る資料とみることができよう。『黄金オルドの祭祀』によれば、清朝時代になって、大ハーンが存在が認められなくなったため、ジノン1人で大ハーンの義務を兼ねていたという。ことにチンギス・ハーン祭祀においては、清朝皇帝をハーンとしてみななかったという(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:145)。

2) 祭祀に関する大法(yeke qauli)を収録

「金書」には、祭祀者ダルハトの行動を規定し、祭祀活動を管理する「主君の諸事に関する大法」(ejen-ü kereg-ün yeke qauli) 条項がある。この「大法」には違反者に課す処罰方法も記されている (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:122;131)。清朝時代、祭祀者ダルハトも理藩院の定めた法令にしたがうことを強制されたが、チンギス・ハーンの「四季大祭」に関しては、古来の「大法」とおりに運営することを確認した嘉慶20 (1815) 年の記録があるという (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:122)。

3) 「拝火祭」における炉の祭史ウチュク (altan ordun-u γolumta-yin öčig) を収録

『黄金オルドの祭祀』に収録されている正月1日の「拝火祭」のときに唱えられる祭史ウチュクは、「金書」から写したものである (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:35-38)。正月1日の「拝火祭」は、年度最初の祭祀であり、「炉の祭」を中心とする。これにはジノンの代表が参列することになっていた。具体的には、ダルハトのトゥール (Tuul あるいは Tuγul) 職がヒツジの脂肪尾を木叉で刺して、炉に近づいていくときに、グケチン (Kökečin) 職が「炉のウチュク」を唱える。その際、トゥール職が脂肪尾で炉の周辺をあぶる。この儀礼を「炉をあぶる」(γolumta tögenekü) という (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:35-38;54-55)。後述するセールイスの公表した「金書」にある「これはジェース²をあぶる書なり」(ene jigesü tögenekü sudur bui) も (Serruys 1984:29-62)、「拝火祭」と関連するものであろう。

4) 祭史「大ウチュク」(yeke öčig) と「小ウチュク」(baγ-a öčig) を収録

『黄金オルドの祭祀』には、大小2つのウチュクを収録している (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:43-51;169-208)。ウチュク (öčig) とはチンギス・ハーンの生涯史を語るもので、大ウチュクと小ウチュクのどちらを唱えるかは、献上されたヒツジの丸煮の数による。「祭祀の順序」(Tayilγ-a-yin Darumji) という文書によれば、ヒツジの丸煮を3つ以上供物として使用する儀礼では「大ウチュク」を、ヒツジの丸煮の数が3つ以下のときは「小ウチュク」を唱えるという。近世においては、チンギス・ハーンの八白宮の四季大祭においては「大ウチュク」を、その他の小祭のときには「小ウチュク」を唱えていたという (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:43-51)。大ウチュクの方が長く、「歴史」を詳しく語っているのに対して、小ウチュクの方は簡素である。

5) 「チンギス・ハーンの大マンライ・トゥゲル (yeke manglai tügel)」を収録

²ジェースの具体的な実態は不詳である。

トゥゲルとは直訳すれば「分配」の意味である。八白宮の祭祀において、トゥゲルは大ハーンより英雄功臣らの子孫に恩賜としての肉を分けあたえる儀礼を指す。この際、英雄功臣らの功績を詠みあげる。その功績を書き記したのが「チンギス・ハーンの大マンライ・トゥゲル」(Činggis qaγan-u yeke manglai tügel) である (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:78-104)。祭史ウチュクはチンギス・ハーンの歴史と偉業を語るものであるのに対して、トゥゲルはチンギス・ハーンに追随した臣下たちの功績を述べるものである。トゥゲルには、「チンギス・ハーンの大マンライ・トゥゲル」のほかに、「チンギス・ハーンの大黄金トゥゲル」(Činggis qaγan-u yeke altan tügel)、「大マンライ・トゥゲル」(yeke manglai tügel)、「黄金オルドの外のトゥゲル」(altan ordun-u γadan-a-yin tügel) などいくつかの別名がある (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:103)。

6) 「99頭の白い牝ウマの乳の振りまき」(yire yesün čaγaγčin-u sün sačuli) を収録

「99頭の白い牝ウマの乳の振りまき」という祝詞 (irügel) は、陰暦3月21日の「白い群れ祭」のときに、ジノンの専属祝詞師 (Irügelči) が唱えるものである (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:116-117;146)。『黄金オルドの祭祀』に収録されている「99頭の白い牝ウマの乳の振りまき」という祝詞は、ジャサク旗の旗王シャグドルジャブの秘書をつとめていたドルジをはじめ、ラシニマ、ダルハトのグケチン職のボーソル、チョロンドルジ、バトチルらが唱えていたものを基本としている (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:146-156)。

7) 諸種の祝詞を収録

八白宮の祭祀においてさまざまな祝詞が唱えられる。祭史ウチュクと祝詞を集めた「祭史ウチュクと祝詞の金書」(Öčig Irügel-ün Altan Bičig) があつた (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:157-159;212)。祭祀者ダルハトの1人、グケチン職のボーソルは、「金書」内の祭史ウチュクと祝詞を記憶し、50数年にわたって諸種の儀礼の場で唱えたという (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:212)。

8) 「天の歌」の収録

「金書」には「天のことば」(tngrī-yin kele) で書かれた「天の歌」(tngrī-yin daγu) を収録していたが、『黄金オルドの祭祀』では「金書」所収の「天の歌」を呈示しておらず、かわりにダルハトのチャルキチ (Čargiči) 職のグルジャブのうたったものを収録している (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:165-166)。「天の歌」はまた「12の歌」(arban qoyar daγu) ともいう。春季の「白い群れ祭」のとき、「オルドの大祭」(ordun-u yeke

tayily-a)の一環としておこなわれる「マンライラホ」(manglayilaqu)儀礼のときにうたわれる。マンライラホとは、祭祀の最高監督ジノンをはじめ、各万戸長、千戸長らが献酒することを指す。この際、2人の祭祀者ダルハトがジノンの両側に立ってうたう。

9) チンギス・ハーンの軍神カラ・スウルデ関係の文書を収録

『黄金オルドの祭祀』では「ボクド・エジンのカラ・スウルデのウチュク」(boγda ejen-ü qar-a sülde-yin öčig)、「鎮遠大カラ・スウルデのウチュク」(qariy-a yeketü qar-a sülde-yin öčig)などの祭史ウチュクを「金書」から写して収録している (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:284-285;300-304)。サインジャラガルとシャラルダイは、「金書」にあるカラ・スウルデ関連の文書を年代記『水晶鑑』(Bolur Toli)内のカラ・スウルデに関する表現と比較している (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:285)。

以上、『黄金オルドの祭祀』内の記述を中心に、「金書」と儀礼との関係を要約した。サインジャラガルとシャラルダイによると、「金書」はなん種類もあり、おのおのの「金書」にはさらに複数の異写本があるという。内容的には祭祀に関する諸種の規定と法律をはじめ、祝詞や祭史ウチュクなど豊富な領域におよぶ。八白宮のなかでも、チンギス・ハーンと第一夫人ボルテ妃の祭殿で使う「金書」と、第二夫人クラン妃の祭殿で使う「金書」のように、白宮ごとの「金書」もあった。著者は複数の「金書」と実際に祭祀にたずさわっていた祭祀者ダルハトたちの記憶とを比較している (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:75;103;146;212)。

2 「金書」の伝播

チンギス・ハーン祭祀は、長いあいだオルドス・モンゴル族によって、オルドス地域で維持されてきた。19世紀後半、外モンゴルの東部にあるチンギス・ハーンゆかりの聖地、ケルレン河のほとりに、チンギス・ハーンを祭る「廟」が現れる。本章では、この「廟」の建造と「金書」のケルレン河への伝播について述べたい。

2.1 ケルレン・バラス・ホトの「守護神チンギス・ハーン廟」

オルドス地域の八白宮以外に、外モンゴルのハルハ部セチェン・ハン盟のバヤン・エルケト地域に「守護神チンギス・ハーン廟」(Činggis-un sitügen süm-e)があった。この廟は、ケルレン・バラス・ホト盟 (kerülün bars qota-yin čiyulγan) の盟長をつ

とめていた郡王トクトホトゥル (Toγtaqutörü) が1864 (同治3) 年に建てたものである。「守護神チンギス・ハーン廟」で使用されていた祭祀文書は、オルドス地域の八白宮の文書を写したものである (Rintchen 1959a:9;1959b:9)。私は、これをかりに「ケルレン・バラス・ホトの文書」とよぶことにする。

なぜ19世紀60年代という時期に、ケルレン・バラス・ホトという地域にチンギス・ハーン廟を建てたのかを考証する必要がある。そのためには、まずその設立者郡王トクトホトゥルについて簡単に紹介することからはじめよう。

ケルレン・バラス・ホトの「守護神チンギス・ハーン廟」に関する資料は少ない。唯一、著名な歴史学者ナツァクドルジの研究がある (Načacydorj 1968)。郡王トクトホトゥルは、近世ハルハ・モンゴル族の賢明な指導者として広く知られている。民間では広く「ト・ワン (王)」とよばれ親しまれてきた。社会主義時代のモンゴル人民共和国では、ト・ワンの歴史はすべて否定された。そのため、ナツァクドルジの研究も、完璧なものとはほど遠いのが事実である。1992年の民主化以降のモンゴル国では、ト・ワンの歴史も見直され、「ト・ワン・ブーム」がおこっている。ト・ワンに関する数種のパンフレットが出版されているが、社会主義時代の空白が長すぎたためか、学術的価値は皆無である。依然としてナツァクドルジの研究に頼らざるを得ない状況のなかで、私は1997年8月にケルレン・バラス・ホトを訪ねることができた。

ケルレン・バラス・ホトは現在、モンゴル国ドロヌート県内、県庁所在地チョイバルサン市の西約90数キロメートルのところ、ケルレン河の北側にある。城壁のなかに契丹時代のものと思われる仏塔がたたずんでいる。ところが、いわゆるケルレン・バラス・ホトの「守護神チンギス・ハーン廟」は、この遺跡にあったわけではない。私が同県の博物館長に確認したところ、「守護神チンギス・ハーン廟」は、ケルレン河の南岸、現在のブルガン・ソム境内にあったとの情報を得た。具体的には、ケルレン河の南約10キロメートル、ブルガン・ソム政府の西約20数キロメートルのところにあったという。1966年から発掘調査もおこなわれ、チベット仏教関係のものが出土し、現在県立博物館に展示されている。現地の人たちはかつて「チンギス・ハーンの幡の寺」(Činggis-un Tuγ-un süm-e)、「幡の寺」(Tuγ-un süm-e) などとよんでいたという³。

ナツァクドルジによると、トクトホトゥルことト・ワンは1797年にセチェン・ハン・アイマクの王、バトオチルの長男として生まれた。1822年に父バトオチルの死を受けて、ト

³ リンチンが編纂した『モンゴル人民共和国民族学研究・言語研究地図』には、ブルガン・ソム内にはこのような寺がなく、その西隣のフルンベイル・ソムに「幡の寺」が記されている (Rinčen 1979:33;58)。

クトホトゥルが父王の旗を管理することになる。4つのソムからなるト・ワンの旗はだいたい今日のモンゴル国ドロヌート県ハルハ河ソム周辺にあたる (Načarydorj 1968:7-10)。

ト・ワンの名が広く知られるようになったのは、一連の旗政改革をおこなったためである。19世紀のモンゴルは、清朝政府全体の衰弱と腐敗にともない、政治と財政の両面で苦境に陥っていた。ト・ワンは牧民の生活レベルを向上させる手段として、移動を基本とする伝統遊牧を奨励すると同時に、畜産品の加工をはじめとする手工業や農業にも力を入れた。財政再建の政策が実り、ト・ワンの旗はハルハ・モンゴルのなかでも豊かな旗になった。

ト・ワンは経済を重視するだけでなく、民族文化の復興にも着手した。学校を設立し、教育の発展をはかった。ト・ワンはその在任中、とくに1834年から1866年のあいだに数多くの仏教寺院と宮殿を建設した (Načarydorj 1968:52)。かれはチベット仏教を盲信する人物ではなかった。僧侶が仏教経典をチベット語で鵜呑みに詠むのに反対し、経典のモンゴル語訳を推進し、「仏教のモンゴル化」を目指した (Načarydorj 1968:58-60)。

1866 (同治5) 年、ト・ワン70才の誕生祝いの際、郡王の身分でありながら、「九白の貢物」を受けた。当時、「九白の貢物」はもっぱら清朝皇帝にのみ献上する最高級の貢物であった (Načarydorj 1968:89)。一連の改革や政治手腕の発揮ぶりから、ト・ワンは清朝から独立してモンゴルの大ハーンになろうとしている、と現地のモンゴル人はみていたようである (Načarydorj 1968:52-53)。1868 (同治7) 年4月6日、北京から故郷へ向かう途中、ト・ワンは病死した (Načarydorj 1968:90)。

以上のことから、ト・ワンは旗の再建を通してモンゴル全体の復興を目指していた開明人物であったことがわかる。ケルレンはチンギス・ハーンとゆかりの深いモンゴルの聖地である。チンギス・ハーンの直系子孫としてモンゴルの聖地において政治に携わる王である以上、かれがチンギス・ハーンのような人物になろうとしていたことは容易に理解できよう。ト・ワンが改革を通してモンゴルを再建するためには、みずからの正統性を示す必要があったのであろう。歴代大ハーンが八白宮にみずからの正統性を求めたのと同じく、ト・ワンも八白宮に注目した。当時八白宮の祭祀者ダルハトたちはチンギス・ハーンの遺物を携えてモンゴル各地を巡回し、ケルレンは主要な巡回地の1つであった。ト・ワンはおそらく巡回中のダルハトと出会い、戦略をたてていたのであろう。ト・ワンはオルドス地域の八白宮に倣って、新たに別の八白宮としての「守護神チンギス・ハーン廟」を建てたのである。

廟のなかにはチンギス・ハーンとその「9人の元帥」の像を飾り、弓、矢、鎧、幡な

どを祭っていた (Rintchen 1959a:9)。ある程度体系化した祭祀活動もおこなわれていたのであろう。祭祀に使用される文書はオルドスの八白宮の文書を利用した。「秘密の書」とされる祭祀文書をト・ワンの「守護神チンギス・ハーン廟」に提供していることからみると、オルドスの八白宮の祭祀者ダルハトたちもト・ワンの政治手腕を十分評価していたのであろう。

不思議なことに、ナツァクドルジはト・ワンの一生を緻密に書いているにもかかわらず、「守護神チンギス・ハーン廟」の建設については触れていない。この謎をとくには、1960年代という時代背景を理解しなければならない。1960年代後半には、中・ソ反目が激化し、ソ連ではチンギス・ハーンを侵略者と位置づけて批判を展開していた。ソ連の衛星国の立場にあったモンゴル人民共和国でもチンギス・ハーンはタブー視されていた。そうしたなかで、ト・ワンの偉業の1つとして「守護神チンギス・ハーン廟」の建設について語ることは危険な行為であったにちがいない。当時の社会主義史観に立脚しト・ワンを「牧民を搾取した王」としながらも、字間句行からト・ワンに対する賞賛の意がおのずと溢れているのは、歴史家ナツァクドルジの文才によるものであろう。ナツァクドルジは意識的にト・ワンの建てた「守護神チンギス・ハーン廟」を明言しなかったのであろう。

2.2 リンチンとケルレン・バラス・ホトの文書

リンチンは1959年に書いた「天のことば」に関する報告（後述第5章参照）のなかで、「30年前」に偶然ケルレン・バラス・ホトの文書を手に入れたとしている (Rintchen 1959a:9)。いわゆる「30年前」とは単純計算で1929年になる。

一方、同じ1959年に公表したシャマニズムに関するテキスト集のなかに、ケルレン・バラス・ホトの文書が3つ収録されている (Rintchen 1959b:59-65)。そのナンバーはそれぞれxxix, xxx, xxxiである。そのうち1番目すなわち第xxix番の文書の欠落語句の箇所に、リンチンは脚注をつけ、文書のオリジナルは、1937年にケルレン・バラス・ホトの「守護神チンギス・ハーン廟」が破壊されたときに行方不明になったと書いている (Rintchen 1959b:59)。となると、リンチンはオリジナル文書を転写したのではなく、「30年前」の1929年に複写本を手に入れ、それを転写したことになる。

ケルレン・バラス・ホトの3番目、第xxxi番文書の最後には、つぎのような内容がある (Rintchen 1959b:65)。

モンゴル・アラト・ウルス (Mongγol arad ulus) 16年に、ハン・ヘンティ・ウーラ盟のトゥシレケ・ハン・ウーラ旗内にある、ケルレン・バラス・ホトの近く、バヤン・エルケトという地にあった守護神、チンギス・ハーンのトゥク (幡) の廟 (Činggis-un tuγ-un sitügen süm-e) から書きうつした。

この守護神は、大清国同治2年 (1863) に、郡王トクトホトゥルが盟の長官をつとめていたときに建てたという。

ここで焦点となるのは、「モンゴル・アラト・ウルス (Mongγol arad ulus) 16年」という表現である。それをあきらかにするためには、モンゴル国独立の歴史を回顧する必要がある。

1911年に清朝の崩壊をきっかけに独立宣言が発せられる。その後独立を取り消されたり、中華民国の軍事干渉を受けたりして紆余曲折を経験する。1921年に人民革命が起こり、1924年にはジェブツンダンバ8世の死去を受けてモンゴル人民共和国が成立する。「モンゴル・アラト・ウルス」は、通常1924年に成立した「モンゴル人民共和国」を指すとされる。

「モンゴル・アラト・ウルス16年」を「モンゴル人民共和国16年」とすれば、1940年になる。また、1921年を元年とすれば、「モンゴル・アラト・ウルス16年」は1937年になる。1937年には、ケルレン・バラス・ホトの「守護神チンギス・ハーン廟」が破壊された。

一方、リンチンは1924年から1927年のあいだ、レニングラードに留学していた。1927年夏に帰国したあと、啓蒙省 (gegerel-ün yamun) 所属の史籍研究所でジャムツァラーノらとともに研究生活を送る (Rinčen 1990:14-15; Gombojab 1975:7)。やがて1930年代後半から大規模な宗教弾圧運動が起こり、1937年にリンチンも逮捕され、1942年まで収監される (Rinčen 1990:16)。したがってリンチンにとっては、1937年にも1940年にも文書を書き写すことは不可能である。

民族文化中心主義者は一般に、1911年を「モンゴル・アラト・ウルス元年」として数える立場を採る者が多い。つまり1911年の独立を建国年として重要視するのである。1911年を元年として起算すれば、「モンゴル・アラト・ウルス16年」は1927年になる。1927年にはリンチンはジャムツァラーノと行動をともにしており、その他の知識人も民族文化の保存研究に熱心であり、かつこれがリンチンのいう「30年前」との表現と

もほぼ一致する。ケルレン・バラス・ホトの文書を書きうつしたのが、たとえリンチンでなかったとしても、書きうつしの時期は1927年とみるのが適当であろう。

1959年に公表されたテキスト集の序文は1958年1月に書かれたものである。このときリンチンは共和国科学アカデミー創立関連の仕事に従事していた(Rinčen 1990:16)。当時はまだ社会主義の思想上の取締りが厳しかった。そのため、かれは1929年にみずからが手に入れた文書を使わずに、1937年に誰かが書きうつしたのを利用したのではないかと私は推察している⁴。

2.3 ケルレン・バラス・ホトの文書に関する私の調査

私は1997年7月末から8月上旬にかけて、モンゴル国首都ウランバートル市内にある国立中央図書館で文書調査をおこなった。その際、ケルレン・バラス・ホトのオリジナル文書から書きうつしたものをみることもできた。No.1185/96のこの文書は、「麻紙」という中国製の白い紙に書いてある。26cm×26.3cmの大きさと、全部で12枚からなっており、左綴じの冊子本である。いつ誰が収集したかなどの情報はまったくない。

文書は、黄布のカバーに青布で裏打ちしている。黄布カバーは図書館側がつけたもので、これには親切にも「ボクト・チンギス・ハーンの献香祭祀・スウルデの献香・献上する祭史ウチュクとともにあり」(Boγda Činggis qaγan-u sang takil,sülde-yin sang,ergükü öčig qamtu bui) という整理者によるタイトルがつけられてある。以下では、これをリンチンが公表したケルレン・バラス・ホトのテキストと比較する。なお、【 】内の漢数字は頁を表し、ローマ数字は行数を意味する。文書の文字は3枚目からはじまっており、私はこの3枚目を【一】とする。

2.3.1 文書のタイトルと内容分類

本来の表紙にはつぎのような3行の内容がある。

Boγda Činggis qaγan-u sang takil üiledküi-yin yosu::

Boγda ejen Činggis qaγan-u sitügsen altan sülde-yin sang::

Suutu boγda Činggis qaγan-ugegegen-e ergükü öčig orosibai::

⁴ リンチンはテキストの短い脚注のなかで、モンゴル人民共和国国内でおこなわれた宗教弾圧運動に対する憤慨をあらわにしている(Rintchen 1959b:59)。このテキスト集は、外国で出版されているから、政府に対して批判的な態度をとることができたのであろう。

これは、文書全体が大きく3つの異なる部分からなっていることを意味している。ところが、リンチンはこの3行を1つの文書すなわち第xxix番文書のタイトルとして理解していたようである (Rintchen 1959b:59)。

リンチンは、ケルレン・バラス・ホトの文書を以下の3つに分けている (Rintchen 1959b:59-65)。

- 1: Boyda Činggis qaγan-u sang takil üiledküi-yin yosu::
 Boyda ejen Činggis qaγan-u sitügsen altan sülde-yin sang::
 Suutu boyda Činggis qaγan-u gegegen-e ergükü öčig orosibai::
- 2: Erte urida yeke baγ-a Mongγol-un üy-e-dür boyda ejen Činggis qaγan-u sitügsen
 altan sülde-yin sang orusibai.
- 3: Suutu boyda Činggis qaγan-u gegegen-e ergükü öčig.

文書全体を大きく3つに分けることには、私も基本的には賛成するが、それだけでは短絡的すぎる。この文書の特徴はオルドスのチンギス・ハーン祭祀における他の「金書」と同じように、その全体が「唱える部分」(各種「祈祷文」、「祝詞」類)と「指針的部分」からなっている。この特徴に、リンチンはまったく気づいていないようである。以下は私の分類である。

1) 「ボクド・チンギス・ハーンの献香・祭祀を営む礼法、諸事と希望を速やかに成就させる者たる歓喜という(書)」

【一】頁の最初の2行はつぎのような内容である。

- 1: Boyda Činggis qaγan-u sang takil üiledküi-yin yosu.kereg küsel-i
 ボクド・チンギス・ハーンの献香・祭祀を営む礼法、諸事と希望を
- 2: türgen бүтүгегчи чөнгөл-үн кемегдекү орусбай::
 速やかに成就させる者たる歓喜という(書)

この2行は、おそらく「ボクド・チンギス・ハーンの献香・祭祀を営む礼法、諸事と希望を速やかに成就させる者たる歓喜という(書)」というテキストのタイトルであろう。ただし、その内容は収録されておらず、タイトルのみにとどまっているといわざるを得ない。私がこのように考える理由は、ほかにこれとほぼ同じタイトルのついた文書があるからである。詳しくは後述するが、モスタールトがオルドスから収集した文書類のなかにもほぼ同様なタイトルのついたものがあり、セールイスが作成したカタログのなかではそれを第76番にしている (Serruys 1975:200)。イタリアのモンゴル学者キョードー女史はこの文書をみたことがあるらしい。1987年にオルドスから出版

された『オルドス文化遺産』(Ordus-un Suyul-un Öb) 第2号に女史の好意から譲りうけたものが掲載されている(Kürelbayatur 1987:182-190)。

ケルレン・バラス・ホトの文書は、オルドスのチンギス・ハーン祭殿にあった「金書」を書きうつしたものであるという背景を考えると、なんらかの事情でタイトルだけ書きうつし、その中味を書かなかった可能性が浮かびあがってくる。

2) 「エジン・サン」(【一】3～【四】7)

リンチンが表紙にある3行の内容をタイトルとまちがえていることはすでに述べた。かれが第xxix番としているこのテキストを、現在のオルドスでは、「エジン・サン」(ejen sang)とよぶ。『黄金オルドの祭祀』でもこれと同じ内容のテキストに「エジン・サン」というタイトルをつけている。ただし、【四】頁の4行から【四】頁の7行までの内容を、『黄金オルドの祭祀』では「エジン・サンのラシ」(ejen sang-un rasi)に分類しているのに対して、ケルレン・バラス・ホトの文書は分けていない。

1966年までのオルドス地域では、「エジン・サン」は、すべてのモンゴル族男性が記憶しなければならない祭祀用賛歌の1つであった⁵。モンゴル族の家庭では、毎朝男性主人がキ・モリ⁶に香を捧げてから、「エジン・サン」を唱えていた。また、各旗のモンゴル軍も毎朝、あるいは出陣の際に集団で朗唱していた。そのため、民間には「エジン・サン」の手写本が多く、私も数種を収集したことがある。

サインジャラガルとシャラルダイによると、近世、八白宮の祭祀において、各種の儀礼はかならず「エジン・サン」の朗唱からはじまるようになったという。平日でも祭祀者のダルハトは朝晩2回祭殿内で「エジン・サン」を朗唱していた。これはチベット仏教の伝播にともなう変容である(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:29-30)。サインジャラガルとシャラルダイは、エジン・ホロー旗に住むダルハトのジロチン・ケシクに属するアユルタイ、ソミヤらの保存していた「サンの書」(sang-un sudur)という写本から書き写して、ダルハトたちに検討してもらい、さらにハンギン旗、ダラト旗、オトク旗らにある写本と比較したうえで、「エジン・サン」として呈示している(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:35)。

サインジャラガルとシャラルダイの記述と照合し、そしてなによりもオルドス地域において「エジン・サン」が独立したものとして普及していることから、リンチンの

⁵ 女性は口にしてはならなかった。

⁶ キ・モリとは、鉄製の三叉にチベット語の呪文を刷った布片を飾ったものである。三叉はチンギス・ハーンの軍神であったともいわれている。

文書は、その内容とタイトルが一致していないといわざるを得ない。

3) 「スウルデ・イン・サン」(【五】1～【十】14)

【五】頁の最初の2行はつぎのようなものである。

1: Erte urida yeke baγ-a Mongγol-un üy-e-dü boγda ejen Činggis qaγan-u sitügsen

2: altan sülde-yin sang orusibai.

リンチンはこの2行をタイトルとしている (Rintchen 1959b:60-63)。

このテキストをオルドス・モンゴル人は現在「スウルデ・イン・サン」(sülde-yin sang) とよび、上述の「エジン・サン」と同じように民間に広く伝わっている。サインジャラガルとシャラルダイは「エジン・スウルデ・イン・サン」と表記しており、上述のジロチン・ケシクに属するソミヤの「サンの書」から書きうつしたとしている (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:324-329)。

【九】頁の9行から【十】頁14行までは、「スウルデ・イン・サン」に関する補足的な内容である。唱える者自身の名前を明言する箇所が指定されている。また、サンを唱える時間、スウルデを祭るとき、場所、供物なども明記されている。

4) 「エジン・ガトンの祭史ウチュク」(【十一】1～【十五】7)

【十一】頁の1行目にある Suutu boγda Činggis qaγan-ugegegen-e ergükü öčig との一句をリンチンはタイトルとしているが (Rintchen 1959b:63)、私も適切であると思う。

タイトルからわかるように、この文書は、祭史ウチュクのたぐいに入る。祭史ウチュクはチンギス・ハーンの歴史を語るものである。ウチュクには大小2種類あることはすでに触れたとおりである。

サインジャラガルとシャラルダイは「小ウチュク」を「黄金オルドの小ウチュク」と表記している。ケルレン・バラス・ホトの祭史ウチュクを、「黄金オルドの小ウチュク」と比べたところ、違いがみられる。ケルレン・バラス・ホトの祭史ウチュクは、「黄金オルドの小ウチュク」と同じように、チンギス・ハーンの生涯の歴史を簡素に示しているが、随所に「主君たる妃」という意味の「エジン・ガトン」(ejen qatun) との表現がある。一方、「黄金オルドの小ウチュク」では「妃」は欠落している。ケルレン・バラス・ホトの方は、八白宮の1つ、ある妃の祭史ウチュクを書きうつした可能性も否定できない。

また、【十五】頁の8行目から【十六】頁の1行までは、指針的内容である。

5) 抄録者のあとがき? (【十六】頁2～8)

この7行の内容は、抄録者と思われる人物が書いたものであろう。これは、リンチンのテキストにあるものとほぼ同じである。

2.3.2 欠落箇所と語句の違い

リンチンが転写して公表した際に使った文書と、私がウランバートルの国立中央図書館でみた文書とは、同一のものであるかどうか、簡単に結論を下すことはできないようである。というのは、両者を比較したところ、句読点の不一致をはじめ、欠落箇所や語句の面でも異なる点が目立つからである。句読点の不一致は、リンチンの判断によるとしても、語句の面での違いは検討する必要がある。以下両者の語句の相違を逐一比較してみたい。私がウランバートルでみたケルレン・バラス・ホトの文書をUKと、リンチンが公表したテキストをRKと略記する。

エジン・サンの部分:

- UK 【一】 3: Om a-a ○)huu……
 RK p59: Om a hum……
 UK 【一】 3: Ĵii blam-a……
 RK p59: Ĵe,blam-a……
 UK 【一】 12: süü-ü amta……
 RK p59: sün-ü amta……
 UK 【二】 3: Ĵii Činggis……
 RK p59: Ĵe Činggis……
 UK 【二】 5: emgeg ende amurliqui-yin sidi-yi öggün soyurq-a:
 RK: p59: 欠落
 UK 【三】 1: ejen yuryan……
 RK p59: ejen-yügen……
 UK 【三】 4: Ĵii kümün……
 RK p59: Ĵe.kümün……
 UK 【三】 4~5: kele ama siregü be olkiyan-i qariγul:
 RK p59: 欠落
 UK 【三】 6: östü dayisun-i qariγul:burqan baγsi-yin
 7: šasin luγ-a qarsilaγči dayisun-i batu včir meses-iyer ebden

ebden

8: mesele:amin γoul-un sudasu-yi tas tas oγtači:

RK p59: östü dayisun-i batu vačir meses-iyer ebden ebden mesele.

Amin γoul-un sudasu-yi tasu tasu oγtači.

UK 【三】 9~10:……küli küli:edürgeŋ doγsin todqar simnus……

RK p59: küli küli.kedürgeŋ doγsin simnus……

スウルデ・イン・サンの部分:

UK 【五】 1: üy-e-dü

RK p60: üy-e-dür

UK 【五】 3: huu:

RK p60: hum

UK 【五】 5: jalbarin sögüdümüi bi:

RK p60: jalbarin mörgümüi.

UK 【五】 6: quvaraγ-ud-tur

RK p60: quvaraγ-tur

UK 【五】 9: yaγaramtaγai

RK p60: yaγaramγai

UK 【六】 1: sülder-e yeke

RK p60: sülder yeke

UK 【六】 2: ejen qan

RK p60: ejen qaγan

UK 【六】 3: sögedlkegülün

RK p60: sögüdkegülün

UK 【六】 6: simnus-ud-un

RK p61: simnus-un

UK 【六】 7: qubilγan-i qubilγaju

RK p61: qubilγan qubilγaju

UK 【六】 8: simnus-ud-un dayisun-u čerig-üd-i

RK p61: simnus-un dayisun čerig-i

UK 【六】 10: kilingnen

- RK p61: kilinglen
- UK 【六】 11: olan simnus-ud-i köl dour-a-ban mölkegülün giskegülügen.
- RK p61: olan simnus-i köl dour-a-ban mölkügülangken giskigsen
- UK 【六】 12: sedkil-tei
- RK p61: sedkiltei
- UK 【六】 13: čerig-üd-ün dayisun-u terigün-i
- RK p61: čerig-ün dayisun-i terigün-i
- UK 【七】 2: jobalang-tu
- RK p61: jobalangtu
- UK 【八】 1: tusatu sayid-ud
- RK p61: tusatu sayid-un
- UK 【八】 5: egün-i
- RK p61: egüni
- UK 【八】 6: degerem-e
- RK p62: degerem
- UK 【八】 10: čarkital-a
- RK p62: čar kitel-e
- UK 【八】 12: ova di
- RK p62: o di
- UK 【九】 4: delekei-yin ulus-un ejen
- RK p62: delekei-yin ejen
- UK 【九】 9: ma ha dzes-ün
- RK p62: mahačin-a yin
- UK 【九】 9: Van Yung Čing
- RK p62: Güvan Yung Čing
- UK 【九】 10: boγda ejen Činggis
- RK p62: boγda Činggis
- UK 【九】 11~12: jalγamjilan takin sitügen boγda suutu ejen Činggis qaγan
-u sitügen altan qar-a sülde-yin sang.
- RK p62: jalγamjilan takin sitügen altan qar-a sülde-yin sang
- UK 【九】 13: basa busu nigen jüil qabur-un terigün sar-a-yin sin-

e-yin nigen:

【九】 14: Dumdadu sar-a-yin qorin nigen:jun-u dumdadu sar-a-yin arban tabun:ebül-ün terigün sar-a-yin

【十】 1: Arban qayar:dumdadu sar-a-yin qorin γurban:

RK p62: basa busu nigen jüyil qabur-un terigün sar-a-yin arban tabun,ebül-ün terigün sar-a-yin arban qoyar,dumdadu sar-a-yin qorin γurban.

UK 【十】 4: geü-ü čisun

RK p62: gegün-ü čisun

UK 【十】 5: ürtüsün

RK p62: ürtesün

UK 【十】 10: degerem-e

RK p63: degerem

祭史ウチュクの部分:

UK 【十一】 5~6: soyil bal ügei jasaltu:

RK p63: selbil ügei jasaγtu,

UK 【十一】 11: Ordu tümen-i töblen saγuγsan:

RK p63: Ordus tümen-i töblen saγuγsan.

UK 【十一】 12: Bürtelüjin

RK p63: Bürtemüjin

UK 【十二】 5: Ködege arulan

RK p63: Ködege aral-a

UK 【十二】 5: Gem sim

RK p63: Gem jem-e

UK 【十二】 8~9: Naran saran-u kelberi törügsen,Naiman Dayan qayan-u törü-yi abuγsan,Nasu büri öljei törügsen ejen qatun::

RK p63: この2行欠落している。

UK 【十二】 12: saγlaγar modun-u iruγur-tur,

RK p64: saγlaγar modun-u iruγar-tur

UK 【十二】 12: büriyeben

RK p64: büriy-e-ben

- UK 【十三】 3: Gün-i
 RK p64: Gün-e
 UK 【十三】 10: Ĵelme qan
 RK p64: Ĵelmen qan
 UK 【十三】 10: širγulun yabuĵu
 RK p64: sirulun yabuĵu
 UK 【十三】 13: Tobuγun qan
 RK p64: Tobqan qan
 UK 【十四】 1: način-i-ıyan
 RK p64: način-ıyan
 UK 【十四】 1: Toγmuγ dayisun
 RK p64: Toγmaγ dayisun
 UK 【十四】 3: Sartaγul-un Ĵolulča sültüng
 RK p64: Sartaγul-un Ĵolulĵin sültang
 UK 【十四】 11: Ögelen ĵočin eke
 RK p65: Ögelen üĵin eke
 UK 【十五】 2: šilege
 RK p65: silege
 UK 【十五】 8: örgün
 RK p65: örgen
 UK 【十五】 12: Keger-e-yin γang
 RK p65: Keger-e-yin sang
 UK 【十六】 4: Kerülün-ü baras
 RK p65: Kerülün.baras
 UK 【十六】 5: Činggis
 -un sitügen-ü süm-e
 Tuγ
 RK p65: Činggis-un tuγ-un sitügen süm-e

以上、私が調査で得たケルレン・バラス・ホトの文書をリンチンのテキストと比較した。その結果、以下のことが明らかになった。

第一、両者は、語句の面で細かい不一致が多くみられる。これらは、決して同一の文書を使用して転写した際の、不用意なミスとは考えられない。

第二、両者の欠落部分が一致していない。私が調査でみたケルレン・バラス・ホトの文書にはあって、リンチンのテキストには欠落していた部分が3箇所ほどある。

第三、私が調査した文書の祭史ウチュクの部分 (Suutu boyda Činggis qayan-u gegegen-e ergükü öčig) の【十一】頁5～6行に、“soyil bal ügei jasaltu”となっているのが、リンチンのテキストでは“selbil ügei jasaγtu”となっている (Rintchen 1959b:63)。リンチンはここで「別のテキスト」では“soyil bal ügei jasaltu”となっている、との脚注をつけている (Rintchen 1959b:64)。さらに、興味深いことに、私が調査した文書の【十一】頁5～6行の“soyil bal ügei jasaltu”となっている箇所に、鉛筆で“selbil……jasaγtu”という添え書きがある。また、【十三】頁13行の tobuγun の箇所でも、やはり鉛筆で tobqan と書きこんでいる。tobqan はリンチンのテキストにある転写と同じである。以上のことを根拠とすれば、私が1997年8月に調査した文書は、リンチンが指摘していた「別のテキスト」になるのであろう。となると、少なくとも、2種類の「ケルレン・バラス・ホトの文書」の書きうつしがのこっていることになる。

3 従来の「金書」収集と研究

今世紀に入って以来、チンギス・ハーン祭祀に関する研究は、「金書」の収集からはじまったといえる。1950年代、あいついでオルドス入りしたソ連とモンゴル人民共和国の研究者たちは、いずれも「金書」の調査をおこなっている。チンギス・ハーン祭祀に関連する諸文書を、収集と研究の状況から、大きく6つに分類することができよう。

- 1) モスタールト (Mostaert) が収集し、セールイス (Serruys) が若干公表した文書。
- 2) ジャムツァラーノが収集し、リンチンが整理編集した文書。
- 3) ダムディンスレンの文学的研究。
- 4) ディリコフが書きうつして発表した文書。
- 5) リンチンみずからがオルドスで収集した文書。

6) キョードーの研究。

以下では、上述の諸研究者たちが収集研究した「金書」について検討していく。

3.1 モスタールトの文書

ベルギーの神父モスタールトは、1906年から1925年にかけてオルドス地域に滞在した。宣教活動をおこないながら、モンゴル研究に専念し、数多くの文書を収集した (Aubin 1972:218-220; Poppe 1971:164-169)。モスタールトの文書を後日セールイスが整理し、簡素なカタログを作成した (Serruys 1975:191-208)。また、そのうちの一部を論文のかたちで公表している (Serruys 1970:527-535; 1982:141-147; 1984:29-62 その他)⁷。

3.1.1 セールイスによる整理と研究

セールイスのカタログには、全部で155の文書が整理されている。そのうち、チンギス・ハーン祭祀と直接関係があると思われる文書は以下の3つである。なお、ナンバーはセールイスのカタログにある整理番号である。

No.68:Boγda ejen-ü sülde-yin sang orošibai.

No.75:Boγda-yin irügel-ün yamu yosu jang üile-yin debter.

No.76:Činggis-qayan-u öcög takil üiledküi yosun.üiles türgen-e бүтүрчи kemegdekü orošibai.

セールイスは、No.68の文書を1970年に、No.75の文書を1982年と1984年の2回に分けて公表している (Serruys 1970:527-535; 1982:141-147; 1984:29-62)。No.76の文書はウーシン旗のトダイ・タイジの依頼を受けたラマ僧が作成したものであるという (Serruys 1975:200)。このNo.76の文書は1987年にオルドスの『オルドス文化遺産』第2号に収録されている。これは、イタリアのモンゴル学者キョードー女史の好意による掲載である (Kürelbayatur 1987:182-190)。

No.68の文書をオルドスでは「スウルデ・イン・サン」ともいい、かつてオルドス・モンゴル人男性はそれを暗記していた。このテキストの最後には「朝早く香を捧げ、毎日1回慎み深く詠むと、なお良い」(örlöge erte sag-ıyan talbıqu edür-ün nige šimdan kečiyejü

⁷セールイスが公表したモスタールトの文書はほかにも多くある。ここではもっぱらチンギス・ハーン祭祀に関連するものに限定した。なお、これ以外にも私が把握していないものもあるかと思う。

ungsiqu bolbasu masi sayin) という、指針的な内容があり (Serruys 1970:530)、オルドス・モンゴル族の実際の習慣と一致している。『黄金オルドの祭祀』に収録されている「エジン・スウルデ・イン・サン」(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:324-329) と比較したところ、セールイスの公表したテキストの冒頭部分は、『黄金オルドの祭祀』の「エジン・スウルデ・イン・サン」には欠落している。

私は、No.75 の文書に注目してみたい。この文書は、モスタールトが1909年12月にオルドスのジュンガル旗で入手したものである。オリジナル文書の最後にはモンゴル語で「宣統元(1909)年冬の最初の月(陰暦10月)29日」と記されており、作成後まもなく、モスタールトが手に入れていたことがわかる。文書が非常に長いこともあって、セールイスはそれを1982年と1984年の2度に分けて発表している (Serruys 1982:141-147;1984:29-62)

セールイスはNo.75の文書を以下4つの内容に分け (Serruys 1984:29)、訳注をつけている。

- 1) 1b:1-9b:4 Miliyaγud-un öčig
- 2) 9b:5-11a:5 Dalalγ-a
- 3) 11a:6-16a:5 Qorin nigen-e milaγiγud (milaγaγud) qoni-yi
- 4) 16a:6-18b:4 モンゴル語タイトルなし。英語で “Rites and Ceremonies for the ‘White Herd’ (Festival)” としている。

3.1.2 No.75 文書の再検討

私は1996年春にドイツ在住オルドス出身の民族学者ホルチャバートルの好意により、セールイスがNo.75として整理した文書のコピーをみることができた。ホルチャバートルはこの文書のコピーをイタリアのモンゴル学者キョードー女史から受けとったと説明している。

No.75 文書のコピーを詳細に検討した結果、セールイスと異なる分類ができることに気づいた。以下は私の分類である。分類するにあたって、頁表記はセールイスの原則にしたがう。

1) 「ジェースをあぶる書」

冒頭1葉目b面1行目の Ejid qad-un tabiγ takilγ-a ačilal⁸ egeḡ qasiyal-yin ögbe. か

⁸Serruysはačiyalとしている (Serruys 1984:33)。

らはじまり、2葉a面1行の *ejin qayan qatun*⁹*ulus-ıyan jırıyan jayayan atııai* までが1つの内容である。2葉a面1行に *ene jigesü tögnekü sudur bui* とあることから、これを「ジェースをあぶる書」(*jigesü tögnekü sudur*) とよぶことにする¹⁰。セールイスの表記法にしたがえば、1b:1-2a:1の部分にあたる。

2) 「ヒツジが昇天する書」

2葉a面1行目末尾の *jigesün qonin-a* から、2葉b面5行の *Ene qoni mandaqu sudur bui* までは1つのまとまった内容である。これを「ヒツジが昇天する書」(*qoni mandaqu sudur*) とよぶ。セールイスの表記法にしたがうと、2a:1-2b:5の部分にあたる。

いわゆる「昇天するヒツジ」とは、祈祷用のヒツジ (*sıbsılgen qoni*) のことである。毎年陰暦3月21日の「白い群れ祭」の日、「オールドの大祭」の一環として「炉の祭」がおこなわれる。その前に活きたヒツジの内臓を取りだして占う儀礼がある。その際、ダルハトの1人がヒツジの耳もとでチンギス・ハーンに届くように祈祷を託す。つづいてジノンがヒツジを押さえ、ダルハトの「火扱い職」(*ıalçı*) がヒツジを屠殺し、グケチン職が祈祷文を唱える (*Sayınjırıl & Šaraldai 1983:157*)。セールイス文書の2a:1-2b:5の部分は、その祈祷文である。『黄金オールドの祭祀』に収録されている祈祷文とほぼ同じである (*Sayınjırıl & Šaraldai 1983:157-159*)。また、この部分は、『成吉思汗八白室』第七輯の「祈祷の詩」(*sıbsılge-yin silüg*) という文書 (*Narasun & Erdemtü 1987:51*) とほぼ同じである。

3) 「ジョタイ腸を浸す儀礼」に関する内容

2葉b面5行中央の *urida ıurban daqu jodti tögenekü* から3葉b面4行までは、1つのまとまった内容である。セールイスの表記法でいうと、2b:5-3b:4までの部分である。『黄金オールドの祭祀』に照合したところ、「黄金オールドの炉の小ウチュク」(*altan ordun-u ıolumta-yin baı-a öcig*) の一部ならびに「ジョタイの祈祷文」(*jotai-yin irügel*) の一部 (*Sayınjırıl & Šaraldai 1983:36-38;221-223*) と似かよっている。

ここでまず、ジョタイ (*jotai* あるいは *jodtai*) に注目する必要がある。ジョタイとは、腸の一部分の名称である。『黄金オールドの祭祀』によると、チンギス・ハーン祭祀の「冬季大祭」すなわち陰暦10月3日のタスマ祭のとき、オールドスのジュンワン旗が「神聖なヤギ」(*ongıon imayan*) を1頭提供する。そのヤギの皮で特別な皮綱「タスマ」(*tasma*) をつくる。ヤギは陰暦9月29日に屠殺される。その際、2本のやじり (*šor*)

⁹原文ではここで+印をつけ、左側に書きそえているかたちとなっている。

¹⁰Serruys (1984:33) 該当。

の先でジョタイ腸の両端を刺し、火にあぶる。同じく火にあぶった胸肉 (ebčigü) とともに供物となる (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:109-113)。胸肉は「拝火祭」に欠かせない供物である (楊 1997:660)。胸肉と共用し、火にあぶるなどの要素から、ジョタイ腸は「拝火祭」と結びついていることがわかる。

陰暦3月21日におこなわれる「オールドの大祭」において、祈祷用のヒツジを屠殺するときに唱えることばのなかにも *jorɣal jotai* という語句がある (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:158)。また、21日の夜に「ジョタイ腸を浸す」 (*jotai singgegekü*) 儀礼がある。それは、4節の腸、肥腸 (*tuɣuraqai*)、胃袋などを酒で浸すことをいう。これらの腸類をアムス (*amusu*) ¹¹ とともに炉に捧げる。ダルハトのグケチン職が「ジョタイの祝詞」 (*jotai-yin irügel*) を唱える。サインジャラガルとシャラルダイは、「ジョタイを浸す儀礼」は、「古くからの拝火儀礼の習慣」であると説明している¹² (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:221-223)。

4) 「ホトクを祝福する祝詞」

3葉b面5行の *Bulɣan qutuɣ ilegüsün alqursun amusun-iyar* から9葉b面4行の *milɣaɣud-un öčig tegüsbe* までは、1つのまとまった内容で、セールイスの表記法で示すと、3b:5-9b:4 までの部分にあたる。9葉b面4行に「祝福のウチュク終わり」 (*milɣaɣud-un öčig tegüsbe*) とあるから、そのタイトルを「祝福のウチュク」としてもさしつかえないようにみえる。ところが、『黄金オールドの祭祀』と照合比較したところ、内容的には同書に収録されている「ホトクを祝福する祝詞」 (*qutuɣ miliyaqu irügel*) とほぼ同じであることがわかる。同書の「黄金オールドの祝福のウチュク」 (*altan ordun-u miliyaɣud-un öčig*) (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:58-65;70-75) とは異なっている。いまの段階で私は、モスタートが入手したジュンガル旗の文書の方に、書き手によるミスがあったのではないかと推測している。というのは、ウチュクは歴史的側面を強調し (楊 1997:665)、祝詞 (*irügel*) は願いを託す内容である。『黄金オールドの祭祀』にあるウチュクと祝詞は、それぞれの性質とタイトルが一致しているからである。

ここで、「ホトクを祝福する儀礼」について簡単に触れておきたい。ホトクとは、元来「福祿」の意味である。チンギス・ハーンと第一夫人ボルテの祭殿オールドのなかに

¹¹ アムスとは、ヒツジの煮汁に黒砂糖やバターを加えた炊きこみご飯のようなものである (利光 1989:45)。

¹² 『モンゴル秘史』のなかで、ウリヤンハタイ人が森のなかで鹿を狩り、その腸 (*abid*) を焼いて食べるという場面がある。エルデンタイとアルダジャブは、これをモンゴル族狩人や牧民の古くからの伝統であると説明している (Eldengtei & Ardajab 1986:23-25)。

は、貂の皮と五色の絹布でつくった、ふさふさしたものをチンギス・ハーンの遺骨箱の両側に飾り、それをホトクとよぶ (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:58)。求子信仰とも関連し、1種の豊饒儀礼と関わる装置である (楊 1997:652)。「ホトクを祝福する儀礼」は、陰暦5月12日におこなわれる。供物類を捧げてから、2人のダルハトが酸乳やバター、丸煮などを使ってホトクを祝福する (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:57-58)。

5) 「招福の儀礼」に関する内容

9葉b面5行のĴ-a Kitad-un kirqadaγから11葉a面5行のdalalγ-a tegüsbeまでは1つの内容で、「招福」(dalalγ-a)の儀礼に関する内容である。セールイスの表記法で、9b:5-11a:5までの部分に相当する。『黄金オルドの祭祀』に収録されている「チンギス・ハーンの招福の歌」(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:223-225)とは、若干語句の面での違いがみられる。

6) 「ヒツジ占い」に関する内容

11葉a面6行目のQorin nigen-e milayaγud-un qoni-yi ordu-u dotur barijuから16葉a面5行のgilügen sayid-un nomlaγsan¹³-ača jokiyaγsan sudur buiまでは、祈祷用のヒツジを使用して、「ヒツジ占い」をおこなう儀礼に関する内容である。ここで、文の作者も明記されている。セールイスの表記法では、11a:6-16a:5の部分にあたる。

上述の2)の部分は、昇天するヒツジにチンギス・ハーンへの願いを託す内容であるのに対して、ここでは、昇天したヒツジの内臓に表れた「チンギス・ハーンの啓示」を具体的に読みとる内容となっている¹⁴。「祈祷用のヒツジ」には、モンゴル族とチンギス・ハーンとを結びつける役割が与えられている。

7) 「白い群れ祭の慣行」

16葉a面6行のČiγan sürüg-ün jang üile enüから最後部までは陰暦3月21日の「白い群れ祭」に関する指針的内容である。文字通り、この部分を「白い群れ祭の慣行」(Čiγan sürüg-ün jang üile)とよぶことができよう。セールイスの表記法では、16a:6-18b:4の部分にあたる。

以上、モスタールトが収集し、セールイスが公表したNo.75の文書は、7つの内容からなっている。セールイスは、祭祀自体を観察していないため、現実とかけ離れた結果を招いたといわざるを得ない。

¹³セールイスはunalayγsanと転写し、注釈でnomlaγsanの可能性を示唆している。

¹⁴ヒツジの内臓占いについてはQurčabaγatur(1993)を参照されたい。

3.2 ジャムツァラーノが収集し、リンチンが公表した文書

「金書」の収集で大きな成果を得たのはブリヤート・モンゴル族出身のジャムツァラーノである。ジャムツァラーノは1910年4月にチンギス・ハーンの祭殿八白宮を訪ねる。滞在中に数多くの祭祀文書を集めることができた (Rintchen 1959a:10;1959b:9-10)。それらの文書は現在サンクト・ペテルブルクの東洋学研究所図書館 (Library of the Oriental Institute) に保存されている。ジャムツァラーノは「金書」を書きうつしており (Жамцарано 1961:203)、ほかにも数種の「金書」を入手していた可能性がある。ジャムツァラーノの文書の一部を後日リンチンがシャマニズムのテキストとして公表している (Rintchen 1959b)。

3.2.1 ジャムツァラーノと八白宮

ジャムツァラーノを生んだブリヤート・モンゴル族はモンゴル族諸部のなかでもっとも早く西欧文化と接触した集団であった (田中 1990:201)。ブリヤートはまたもっとも早くロシアの植民地にされた地域でもある。ロシア経由の西方思想は知識人のあいだで広まり、モンゴル族全体の統一を目標とする民族自立の気運が強かった。ジャムツァラーノは幼少年時代をブリヤート草原で過ごし、イルクーツクとペテルブルクで教育を受けた。後にペテルブルク大学のモンゴル語の講師をつとめ、広くモンゴル各地を調査した。その研究活動は、モンゴルの英雄叙事詩やシャマニズム口碑の採録からはじまり、法制史、年代記に奥深くわけ入っている。かれは優れた研究者であるだけでなく、革命家としてモンゴル人民革命党の党綱領の起草者の1人でもある (田中 1990:174-211)。

押し寄せるロシアの植民化運動に抵抗するため、ジャムツァラーノなどブリヤート・モンゴル族の知識人はその希望を内外モンゴルに託したのであろう。ジャムツァラーノは1910年にオルドス地域を旅行した (Жамцарано 1961:194-234; Rintchen 1959a:10;1959b:9-10)。その際、八白宮から入手した『十善白史』は、1936年にかれ自身の公表によってはじめて世に知られるようになる (Žamcarano 1955:4-5;50-55)。ジャムツァラーノは文書や口碑を収集するだけでなく、八白宮の外モンゴルへの移転を祭祀者ダルハトたちに勧めていた (Isijamsu 1992:27)。ジャムツァラーノはかなり早い段階から新しいモンゴル国創造の精神的支柱を八白宮に求めていたと推察される。

ジャムツァラーノの行動は、帝政ロシアとその後のソ連の植民活動を妨げるもので

あった。かれは、1932年にウランバートルからレニングラードに召還され、1937年に逮捕され、1940年に謎の死を遂げている（田中 1990:174-176）。

ジャムツァラーノがオルドス地域から収集した文書のうち、八白宮祭祀およびオルドスにあったその他の祭祀に関する文書を、リンチンが公表したシャマニズムに関するテキスト集（1959b）からうかがいしることができる。その数は全部で11ある。以下では、八白宮関連のテキストを検討してみるが、便宜のため、この部分を「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」と略称する¹⁵。

3.2.2 ジャムツァラーノのテキストと『黄金オルドの祭祀』との比較

1) Ejen sülde-yin sang orusiba

リンチンが第xxxiiにあげているこのテキスト（Rintchen 1959b:66）の内容は、「スウルデ・イン・サン」ではなく、「エジン・サン」であることはまちがいない。ただ、若干の語句は、『黄金オルドの祭祀』内に収録されている「エジン・サン」とは、異なっている。

2) Boγda Činggis-un öčig orusiba

リンチンが第xxxiiiにあげているこのテキスト（Rintchen 1959b:67-69）を、『黄金オルドの祭祀』（Sayinjiryal & Šaraldai 1983:43-51）と照合したところ、チンギス・ハーンの生涯を簡素に語る祭史「小ウチュク」であることがわかる。語句の面では、「黄金オルドの小ウチュク」とも若干の異なる表現がある。

3) Qar-a sülde-yin takilγ-a

リンチンが第xxxivにあげているこのテキスト（Rintchen 1959b:69-70）を『黄金オルドの祭祀』に照合したところ、その内容は、「カラ・スウルデのウチュク」であることが判明した。カラ・スウルデは、チンギス・ハーンみずからが祭っていた軍神であるとされている。したがって、チンギス・ハーンがおこなった征服活動における軍神スウルデの果たした威力を語った内容が中心である。「スウルデの威力」とは、実際はスウルデの力を借りたチンギス・ハーン自身の威力である。そのため、内容的には、上述

¹⁵ オリジナル文書をみていない私には、モンゴル学界の碩学リンチンの編集作業における転写、整理について、文献学の立場から云々する資格はないと自覚している。幸い、サインジャラガルとシャルダイの大作『黄金オルドの祭祀』には、八白宮祭祀に関する詳しい記述がある。テキストと儀礼との関連についても要領良い説明がある。また、私自身も1991年から1992年にかけて、八白宮祭祀について実地調査をおこなった。「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」に関する検討は、あくまでも『黄金オルドの祭祀』の記述と私個人の観察に依拠するものであることをかさねて強調しておきたい。

の「黄金オルドの小ウチュク」と重なる部分もある。

「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」と、『黄金オルドの祭祀』に収録されている「大鎮遠カラ・スウルデのウチュク」(qariy-a yeketü qar-a sülde-yin öčig) (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:300-304) とは、語句の順番、表現内容などの面で、異なるところがある。

4) Naiman költü Čayan sülde-yin takilγ-a inu

チャガン・スウルデ（白いスウルデ）はまたチャガン・トゥク（白い幡）ともよばれ、長くオルドス地域のウーシン旗で祭られてきた。現地のモンゴル族およびその祭祀者たちは、チャガン・スウルデを歴史上のモンゴル帝国の国旗と結びつけている（楊 1998）。ジャムツァラーノがオルドスに滞在していたころウーシン旗を訪れたかどうかは不明である。八白宮の1つ、「文書館の白宮」にはさまざまな祭祀文書が保管されていたことから、ジャムツァラーノはウーシン旗に入らなかったとしても、チャガン・スウルデに関する文書に触れることはできたと推測できよう。

長年にわたってチャガン・スウルデについて調査研究をおこなったエルケセチェンは、『ウーシン旗文史資料』（第15輯）のなかで2つの「祭祀」(takilγ-a) という文書を収録している (Erkesečen 1991:42-49)。いずれも、「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」(Rintchen 1959b:71-73) とは、内容上重なるところもあれば、異なる部分もある。

5) Qar-a sülde-yin öčig orusiba

『黄金オルドの祭祀』に収録されている、上述の「大鎮遠カラ・スウルデのウチュク」と比較すると、「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」の方 (Rintchen 1959b:73-76) が長い。両者はとくに前半の部分は似かよっている。「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」の後半にはさらに供物を捧げる目的などの内容がある。この内容は、『黄金オルドの祭祀』にはみられない。

6) Qutuγtu qurim-un tügel

「トゥゲル」とは、「分配」の意味である。「ホトクト」とは、「幸あり」との意味で、「ホトクト・ホリム」とは、陰暦5月15日におこなわれる「夏季大祭」のことである。「夏季大祭」は本来夏の放牧地でおこなわれていたとされ、「湖の大祭」ともいう。この夏季大祭と他の大祭との違いは、祭祀において、「黄金オルドの大マンライ・トゥゲ

ル」(altan ordun-u yeke manglai tügel) を朗唱し、ヤム (yamu) という恩賜¹⁶を配る儀礼がある (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:76-77) 点である。マンライとは、「先鋒」や「最上位」の意味で、「マンライ・トゥゲル」は、最高級の恩賜を意味している。ジャムツァラーノとリンチンのこのテキスト (Rintchen 1959b:76-83) は「黄金オルドの大マンライ・トゥゲル」である。「黄金オルドの大マンライ・トゥゲル」はまた「大マンライ・トゥゲル」(yeke manglai tügel)、「チンギス・ハーンの大マンライ・トゥゲル」(Činggis qaγan-u yeke manglai tügel)、「黄金オルドのそとのトゥゲル」(altan ordun-u γadan-a-yin tügel) などともいう (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:103) が、祭祀者のダルハトたちは単に「トゥゲル」と略称する。

トゥゲルには数多くの人名が登場する。13世紀チンギス・ハーン時代の人物名からはじまり、フビライ・ハーンやダヤン・ハーン時代の人物にまでおよぶ。これらの人物は、チンギス・ハーンをはじめとするモンゴルの歴代ハーンに功績を立てた英雄功臣たちである。トゥゲルとは、これらの英雄功臣たちの功績を誉め讃え、その子孫たちに大ハーンからの恩賜を分け与える儀礼である (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:103-104)。

「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」と『黄金オルドの祭祀』に収録されている「黄金オルドの大マンライ・トゥゲル」とを比較したところ、以下の点で違いがみられる。

第一、語句の面で表現の違いがある。たとえば「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」で“Čin joriγ-tu ünən sedkil-tü Arulad-un Boγurji”とある (Rintchen 1959b:77) のに対して『黄金オルドの祭祀』では“Čing joriγtu Laγudai Boγurči”となっている (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:80)。

第二、「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」の冒頭部分は、フビライ・ハーンを讃える内容となっている。「黄金オルドの大マンライ・トゥゲル」にはこのような内容はない。また、「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」の最後の部分、すなわち82頁17行から83頁 (Rintchen 1959b) までの部分も「黄金オルドの大マンライ・トゥゲル」(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:102) にはない。

第三、恩賜を授ける対象者、英雄功臣の人名が違うところがある。

第四、恩賜の対象となる人名の登場順番が違う。「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」では10番目にJelm-e、11番目がJebeである (Rintchen 1959b:78) のに対して、

¹⁶ヤムについてはQurčabilig(1993;1994)を参照されたい。

『黄金オルドの祭祀』では両者が逆転している (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:82-83)。

第五、英雄功臣の属する部族集団、あるいは統率していた部族集団の名称が違う。たとえば、「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」でバルグート (Barγud) 万戸 (Rintchen 1959b:80) が、「黄金オルドの大マンライ・トゥゲル」ではバイト (Bayaγud) 万戸 (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:93) になっている。

第六、「黄金オルドの大マンライ・トゥゲル」ではチングス・ハーンの4人の姻戚ホダの名前があるのに対して、「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」には欠落している。

7) Sülde tngri takiqu sang ene orusiba

『黄金オルドの祭祀』には、スウルデ・テンゲルに関する記述とそれに関連する文書類は収録されていない。リンチンが第 xxxviii にあげているこのテキスト (Rintchen 1959b:83-84) の冒頭に「白いウマのトゥク (幡) を崇拝し、スウルデ・テンゲルを拝む (書) これなり」(čayan morin tuγ-tur sitüjü Sülde tngri-yi jalbariqui inu) とある。おそらく、上述のウーシン旗にあるチャガン・トゥク (白い幡) に関連する文書であろう。

8) Altan uruγ-un sačuli

リンチンが第 xxxix にあげているこのテキスト (Rintchen 1959b:84-86) は、その内容とタイトルが一致しない¹⁷。この文書はチングス・ハーン一族のために乳を振りまくときに唱えるもの (sačuli) ではなく、ガリル (γaril) と称する祖先祭祀のときに使われるものである。テキストには供物を捧げる対象、すなわちチングス・ハーン一族の歴代祖先の名が書かれてあり、私はかつて詳しく検討した (楊 1997a:683-692)。1956年に八白宮を訪れたディリコフもこれとほぼ同じ内容の文書を収集している (Ды л ы к о в 1958:228-274)。

このテキストの最後には祖先祭祀、すなわちガリル祭とは完全に別の内容が5行ほどつづいている (Rintchen 1959b:86)。3月21日の「白い群れ祭」のうちの1儀礼としておこなわれる「99頭の白い牝ウマの乳を振りまく」儀礼 (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:142-156) に関するものである。これは、祝詞類と指針的内容が入り交じるという「金書」の特徴をよく表した部分である。

9) Ejen sülde-dür isüg sačuqui inu

¹⁷ リンチンのミスについては、セールイスも気づいているようである (Serruys 1984:29-33)。

上述の、第 xxxix 番テキストの最後にある「99頭の白い牝ウマの乳を振りまく」儀礼に関する内容は、本来は、リンチンがつづいて第 xxxx にあげているテキスト (Rintchen 1959b:86-87) の冒頭にあった部分であると推定できる。

テキストの最後は「銀杯による占い」、「恩賜の分配」、「金書」の書きうつし (後述第6章参照) についての内容がつづいている。

私は、このテキストはスウルデに乳を振りまく際のものではなく、3月21日の「白い群れ祭」のとき、「99頭の白い牝ウマの乳を振りまく」際に使用されるものであると思う。というのは、ディリコフが1956年に集めた、3月21日に使われるという「金書」のなかの1部分 (Дылыков 1958:229;253-263) とほぼ同じであるからである。つまり、このテキストは「99頭の白い牝ウマの乳を振りまく」際に唱えられる祝詞の1断片であると推断している。

10) Čayan sürüg sačuqui yosun

リンチンが第 xxxxi 番としているこのテキスト (Rintchen 1959b:87-91) のタイトルについて、セールイスはその訳が不正確だと指摘している (Serruys 1982:141;1984:30)。タイトルは、「白い群れ祭における乳を振りまく際の礼法」の略であろうが、テキストには複数の内容が含まれており、乳を振りまく際に唱えられる祝詞とは関係が薄いようである。

まず、テキスト集 (Rintchen 1959b) の87頁にある2段の文章は、春季大祭の前夜祭として、3月20日におこなわれるガリル祭という祖先祭 (楊 1997:676-692) に関する指針的内容である。

つぎに、同テキスト集88頁の第1行から第15行までの文は、モスタールトが収集し、セールイスの公表した「ボクドの祝詞・恩賜ヤムに関する礼法書」(Boγda-yin irügel-ün yamu yosu ĵang üile-yin debter) の冒頭1b:1-2a:1の「ジェースをあぶる書」(ĵigesü tögenekü sudur) と似かよっている。

88頁のテキストのなかに、上から16行目に「祭殿のなかで祝福用のヒツジを押さえ、祝詞師が……」(Miliyaγud-un qonin-i ordu dotur-a bariĵu bayiĵu irügerčün……) とあることから、これは「祝福の儀礼」(miliyaγud-un tayilγ-a) と関連するものであることがわかる。88頁の第17行から23行までの内容は、『成吉思汗八白室』第七輯の「祈祷の詩」(sibsilge-yin silüg) というテキスト (Narasun & Erdemtü 1987:51) と同じである。これは、「祝福用のヒツジ」を祭殿内に連れこみ、生きたまま内臓を取り出して占いをおこなう儀礼を語るものである。占いに使用されるヒツジを「祈祷用のヒ

ツジ」ともよび、内臓を取り出す前に吉兆がでるようにと祈祷をおこなう (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:136; 利光 1989:36-46)。

88 頁 30 行から欠落部分が 4 行半ぐらいある。ここから 90 頁の最後までの内容を検討したところ、「祝福の祝詞」(miliyaγud-un irügel) の 1 種であると判断できそうである。しかし、『黄金オルドの祭祀』にある「祝福の祝詞」(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:58-65) とは、表現法は同じでも、語句の面では、かなり異なる。

91 頁には 4 行半の欠落がみられる。セールイスは、この部分は本来「白い群れ祭における招福儀礼」(Čaγan sürüg-ün dalalγ-a) とよぶ文書の一部であるという (Serruys 1982:141-143)。内容を検討し、かつ『黄金オルドの祭祀』の記述 (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:223-225) と比較したところ、セールイスの指摘は正しいことがわかる。『黄金オルドの祭祀』では、「チンギス・ハーンの招福 (儀礼の) 歌」(Činggis-un dalalγ-a-yin daγu) と表現している。

91 頁にあるこの第 xxxxi 番テキストの最後にある 3 行は、指針的内容となっており、つぎの第 xxxxii 番テキストの冒頭にくるべきものであろう。

11) Yeke qurim-un yosun

チンギス・ハーン祭祀におけるイケ・ホリム (Yeke qurim) とは、『十善白史』にもある (Liu jinsuo 1981:87) 年 4 回おこなわれる「大祭」のことである。リンチンが第 xxxxii 番としてあげているこのテキスト (Rintchen 1959b:91-93) は、91 頁から 93 頁 (上から 6 行目) まだが「イケ・ホリム」に関するものである。93 頁の 7 行から 9 行までは「金書」書きうつしに関する内容である。

93 頁 10 行から 24 行までは、チンギス・ハーンと第一夫人ボルテの祭殿内にある祭祀器具に関する内容である。10 行目の「賢明な主君、妃の黄金宮帳内にある器具の数これなり」(Suu-tu ejen qatun-i altan qarsi-yin dotur-a bariγči saba-yin toγ-a ene bui) をタイトルとみて良いのであろう。

93 頁 25 行から同頁の最後までは、個々の語句しかない欠落の多いテキストである。詳細に検討した結果、この部分も、「大祭」の挙行に関する指針的内容であることはなんの疑いもないことが判明する。

以上、「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」について、主として『黄金オルドの祭祀』と私自身の調査を基準に若干の検討をこころみた。ジャムツァラーノの収集した文書はこれだけではないであろうが、私はまだその全容を把握していない。

3.3 文学の視点から「金書」をみたダムディンスレン

モンゴル人民共和国のダムディンスレンは、『モンゴル古代文学百篇』のなかで、「チンギス・ハーンの大ウチュク」を「詩」(silüg)、「祭祀の詩」(takily-a-yin silüg)として収録している (Damdinsürüng 1982:243-295)。

3.3.1 ダムディンスレンがみた3種の「金書」

ダムディンスレンは3種類の「金書」(「金冊」)を使用している (Damdinsürüng 1982:293-295)。具体的には、つぎの3つのである。

1) 「スウルデの祭殿にあった金書」

オルドスにあるチンギス・ハーンの「スウルデの祭殿」(sülde-yin ordun) すなわちカラ・スウルデの祭殿内にあった「金書」である。ダムディンスレンは、1956年にこの「金書」を書きうつしたという。原本はかなり破損していたうえ、書きうつしを繰り返したため、みずから書きうつしたのも良い写本にはなりえなかったという (Damdinsürüng 1982:293-294)。

2) 「ボクド・チンギス・ハーンのウチュク」

モンゴル人民共和国の図書館には、「ボクド・チンギス・ハーンのウチュク」(Boγda Činggis qaγan-u öčig orusibai) という「黄色い冊子」がある。これは、オルドスのチンギス・ハーンの「金書」の写しで、字句の面でミスがある (Damdinsürüng 1982:294)。ダムディンスレンは、この写本を、誰が書きうつし、いつ図書館に収納されたかなどの情報を提供していない。

3) グルベルジン・ゴワ妃の祭殿内にあった「金書」

八白宮の1つ、グルベルジン・ゴワ妃の祭殿の祭祀者、ホンジン職のダルハトが保存していた「金書」は、保存状態がもっともよく、内容的にも完全であった (Damdinsürüng 1982:294)。グルベルジン・ゴワ妃の祭殿とは、イエスウイ妃とイエスウガン妃姉妹を対象とした祭殿である。かつてオルドスのジュンガル旗にあった。ダムディンスレンはこの「金書」を写真撮影している。ただし、行間に補足して書いた小さい文字は、不明瞭で読みとりにくいという。ダムディンスレンは、この「金書」は諸「金書」のなかで、もっとも良いものであるという。彼は、この「金書」の写真をもとに、他の2種類の「金書」を参考にしながら、「チンギス・ハーンの大ウチュク」として『モンゴル古代文学百篇』に収録している (Damdinsürüng 1982:294)。

3.3.2 ウチュクとトゥゲルの混同

ダムディンスレンは、これらの「金書」を「詩」として公表した際に1つ大きなミスをおかしている。それは、ウチュクとトゥゲルをまったく同一のものとして混同していることである。ダムディンスレンは、「ウチュク」と「トゥゲル」は、両者において各段落の最後の数行だけことばが異なっており、それ以外はまったく同じであるという。そこで、かれは、両者をミックスしたかたちで、独自の「大ウチュク」をつくりあげている (Damdinsürüng 1982:295)。

ウチュクは、「チンギス・ハーンの歴史」を密かに語るものであるのに対して、トゥゲルは、英雄功臣たちに、大ハーンからの「恩賜」を与える際の基準であり、朗々と唱えられるものである。英雄功臣たちは、チンギス・ハーンのために戦った人々が大半を占める。チンギス・ハーンとの関わりを示す内容は、当然、表現上共通点が多くなるのであろう。なにしろ、両者とも口頭によって伝わっていることから、似てくることも予想される。ウチュクとトゥゲルは、その性質が異なっており、たとえ文学作品として理解するとしても、テキストの背景は無視できないのである。

ダムディンスレンは、ウチュクのなかにフビライ・ハーン以降の人物名も登場していることから、ウチュクは最初から完成されたものではなく、後世において少しずつ書き加えていったものであると分析している。とくに16世紀ころに書き加えたいしい15の段落を選びだして別章にしている (Damdinsürüng 1982:295;286-293)。ダムディンスレンは、これら「祭祀の詩」は、モンゴルの伝統的な文学作品としてだけでなく、歴史文献としても価値が高いことに注目している (Damdinsürüng 1982:295)。

3.4 デイリコフが書きうつして発表した文書

ブリヤート・モンゴル族出身のデイリコフは1956年にオルドス地域を訪れている。当時オルドス地域の最高責任者であった馬富綱 (Bayandorji)、王悦豊 (Arbinbayar) らの助力もあって、八白宮に所蔵されていた諸々の文書をみることができた。デイリコフは祭祀者のダルハトから文書を借りて夜に写し、朝またダルハトに返すようにしていた (Дылыков 1958:228-229)。デイリコフは後日そのうち3つのテキストを

公表している。以下は、「金書」に関するディリコフ論文の要約である。

1) ディリコフのみた1番目の文書は「金冊」(Altan Debter)という。黄色い絹布の表紙で、10枚の中国製の紙に金で書いてある。保存状態がよく、毎年3月20日にトゥリシ(tülesi)という供物を燃やすときにこの「金冊」を詠む(Дылыков 1958:229)。私は以前、このテキストを検討した結果、陰暦3月20日におこなわれるガリル祭という祖先祭に使用されるものであることがわかった(楊 1997:683-692)。「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」と比較したところ、リンチンはこれとほぼ同じテキストに「黄金家族の(乳の)振りまき」(altan uruγ-un sačuli)というタイトルをつけている(Rintchen 1959:84)。このタイトルとその内容が一致していない点についてはすでに触れたとおりである。

2) 2番目の文書は「金書」(Altan Bičig)といい、黄色い絹布の表紙で、13枚の中国製の硬い紙に金で書いてあったという。破損した部分と書きなおしをしたところがあり、文書の16頁に「金書」(Altan Bičig)との題があった。この文書は3月21日の祭に使用され、天や大地、河川などを崇拝対象とする、シャマニズムのテキストである。ディリコフはこれを全部書きうつしたという(Дылыков 1958:229)。テキストの最後には、「金書」を書きうつした人物の名前、書きうつしの目的と時期などが明記されている(後述第6章参照)。これを『黄金オルドの祭祀』に収録されているテキストと比較すると、陰暦3月21日の「白い群れ祭」において、「99頭の白い牝ウマの乳を振りまく」際に唱えられるものであることがわかる。

ディリコフのこのテキストの第4頁から最後まで部分は、リンチンが第xxxx番としているテキストとほぼ同じである。リンチンのテキストには「エジン・スウルデに酸乳を振りまく(書)これなり」というタイトルがついている。前半は乳を振りまいて捧げる対象で、後半は「金書」の書きうつしに関するものである(Rintchen 1959:86-87)。

3) 第3の文書には表紙がなく、40枚の紙からなり、破損のひどいものであったという。これは「大祭」(yeke tayily-a)のときに使用するもので、祭祀者ダルハトたちはディリコフに「チンギス・ハーンの伝記のようなもの」と説明していた。ディリコフはこれを全部写すことはできなかったが、テキストとして数行公表している(Дылыков 1958:229-231;272-274)。『黄金オルドの祭祀』を参照すると、陰暦3月21日の

「白い群れ祭」のとき、屋外において、「99頭の白い牝ウマの乳を振りまく」儀礼は「小祭」であり、八白宮の殿内の諸儀礼は「大祭」であるという (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:141;157)。屋外では「99頭の白い牝ウマの乳を振りまく」というテキストが詠まれる。一方、殿内ではウチュクを唱える (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:140-208)。ウチュクはチンギス・ハーンの生涯について語る内容からなっており、祭祀者ダルハトたちはいまでもこれを「歴史」、「チンギス・ハーン伝」とみている。

ディリコフのこのテキストをダルハトたちが「伝記」とみている点、さらにそれが「大祭」のときに使用されるという2点から、祭史ウチュクであると判断できよう。『黄金オルドの祭祀』に収録されているさまざまなテキストと比較したところ、「黄金オルドの小ウチュク」(altan ordun-u bay-a öčig)の冒頭部分 (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:43-45) とほぼ同じであることから、ディリコフが第3番としているこの不完全なテキストは、「小ウチュク」の一部であることがわかる。

以上、ディリコフのテキストは、数としては少ないものの、陰暦3月20日から3月21日にかけての祭祀における、もっとも重要な儀礼、すなわち「ガリル」という祖先祭、「99頭の白い牝ウマの乳を振りまく」儀礼、それに「大祭」、という3つの主要な儀礼をカバーしている。その意味でディリコフの書きうつしたテキストはきわめて貴重なものである。

3.5 リンチンみずからがオルドスで収集した文書

リンチンは、1957年の夏にオルドス地域の八白宮を訪れている。リンチンは、それ以前からジャムツァラーノがオルドスでおこなった調査および収集した資料に強い関心をもっていた。リンチンが訪れたとき、500戸の「黄色いダルハト」はすでに解散させられ、7人だけがのこされて祭祀活動に従事していた¹⁸。中国政府が新たに建てた「チンギス・ハーン陵」(Činggis Qaγan-u Ongγun)が完成し、政府による干渉を受けた直後であった。7人のダルハトのうち、アユール (Ayur) という人物が長老であった。ジャムツァラーノが1910年に八白宮で滞在していたころのインフォーマントであった、ダルハトのナソンチョクト長官の甥がアユールである。ナソンチョクトもアユールも、チンギス・ハーンの九駿と称する將軍の1人、ブグルチ・ノヤンの直系子孫であ

¹⁸ 私が調査で得た情報では、1956年にのこされたダルハトは8人であった。それは、チンギス・ハーンと第一夫人ボルテを祭るダルハト4人、クラン妃のダルハト1人、イエスウイ妃とイエスウガン妃姉妹を祭るダルハト1人、軍神カラ・スウルデのダルハト2人の合計8人であった。

る。現在のこっているブグルチ・ノヤンの家系譜 (küüg Büγurči-yin ger-ün üy-e-yin čadiγ) によると、ナソンチョクトはホンジン職で、アユール (正確にはアユールザナである) はイルクー (Iraγuu) 職であった (Narasun & Erdemtü 1987:239-254)。現在、八白宮祭祀を主宰する中堅的なダルハトの1人グルジャブは、アユールの孫である。1910年当時、アユールは12才であった。したがって、1957年の時点で、アユールは59才になっていたことになる。アユールは、ジャムツァラーノとナソンチョクトとの会話を覚えていた (Rintschen 1959a:16-17)。1959年にシャマニズムに関するテキスト集を発表した際には、このときの成果も含まれている。以下はリンチンみずからが収集したテキストである。

1) Böke Belgütei-yin öčig-ün sudur

ブケ・ベルクータイとは、チンギス・ハーンの異母弟である。ベルクータイを祭る祭殿は1956年まで、オトク旗領内のエレーン・トロガイというところにあった (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:395-402)。1966年に「文化大革命」がはじまり、祭祀者集団が迫害を受けて解散を強いられた。1996年に私がエレーン・トロガイで調査をおこなった際、ベルクータイの祭祀に関する情報を知っている人は少なくなっていた。リンチンが第xxxxiii番にしているこのテキスト (Rintchen 1959b:94-97) の最後には、「イケ・ジョー (盟) オトク旗の祭祀用冊子」 (yeke juu-yin Oturγ qosirγun-a takiqu sudur bolai) とある (Rintchen 1959b:97)。イケ・ジョーとは、オルドスを指す清朝時代からの行政組織名で、オトク旗は、オルドス7旗の1つである。

2) Boγda esi qatun-u öčig

エシ・ガトンあるいはイシ・ガトンとは、チンギス・ハーンの末子トロイ・エジンの妃である。エシ・ガトンを対象とした祭殿はかつて1956年までジュンワン旗領内にあった。具体的には、イケ・エジン・ホローの東、シベルタイ河のチャガン・デレスという地にあった (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:379-380)。エシ・ガトンの祭祀について、オルドス出身の民族学者ホルチャビリクの一連の研究がある (Qurčabilig 1990:71-78; 1992a:91-100; 1992b:22-24) が、エシ・ガトンに関するテキストは公表されていない。リンチンのテキスト (Rintchen 1959b:97-99) は、エシ・ガトン祭祀を研究するうえで、重要な資料である。

3) Alaγ sülde-yin sang böged öčig orusiba

アラク・スウルデ (まだらのスウルデ) はかつて1956年までオトク旗領内のマラト

という地で祭られていた (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:380;402-403)。一部のオルドス・モンゴル人は、このスウルデはチンギス・ハーンの弟、ハプト・ハサルの軍神であるともいう (楊 1998)。アラク・スウルデがオトク旗にあることからすると、このテキスト (Rintchen 1959b:99-101) も上述の第 xxxxi 番ブケ・ベルクータイに関するテキストと同じく、「イケ・ジョー (盟) オトク旗の祭祀用冊子」に入っていた可能性が高い。

4) Qulan saran-u öčig.γolumta-yin öčig

クラン妃は、チンギス・ハーンの第二夫人である。クラン妃の祭殿は八白宮の1つで、かつてジャサク旗のホワ・トロガイという地にあった。オルドス・モンゴル人はこの地をバガ・エジン・ホローとよんでいた (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:243-251)。リンチンのこのテキスト (Rintchen 1959b:101-102) の最後には「ジャサク旗の (祭祀用?) 冊子」(jasay qosiyun-u sudur bolai) とある (Rintchen 1959b:102)。リンチンが、「イケ・ジョー (盟) オトク旗の祭祀用冊子」と「ジャサク旗の (祭祀用?) 冊子」を八白宮から入手していることからみれば、八白宮にはオルドスの各地にあったさまざまな祭殿に関する祭祀文書が保存されていたことはほぼ確実といえよう。

5) Jigesün irügel orusibai

リンチンのこの短いテキスト (Rintchen 1959b:102) は、上述の「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」にある第 xxxxi 番テキストの 88 頁の冒頭部分 (Rintchen 1959b:88) と似かよっている。また、両者ともセールイスの公表した文書 (Serruys 1984:33) の冒頭部分 (1b:1-2a:1) とも似ている。セールイスの公表した文書では、「これはジェースをあぶる書である」とあるのに対して、ここでは「ジェースの祝詞」となっている。

6) Qonin-u sibsilge

リンチンのこのテキスト (Rintchen 1959b:103) は、祈祷用のヒツジに関するものである。一部は、上述の「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」にある第 xxxxi 番テキストの 88 頁の 18 行から 30 行までの部分 (Rintchen 1959b:88) と似かよっている。八白宮の諸祭祀において、祈祷用のヒツジは頻繁に使用される。具体的にどの儀礼における祈祷文であるかは、判断のしようがない。

7) Qulan qatun-u čomčoγ-un miliyaγud

リンチンのこのテキスト (Rintchen 1959b:103) は、クラン妃の祭殿における「祝福の儀礼」に関するものである。

8) (Qulan qatun-u) Bulaγan qutuγ

リンチンが第L番にしているこのテキスト (Rintchen 1959b:104-106) のタイトルは、転写でBulaγan qutuγとしているが、フランス語訳はLa prière 《Bonheur zibeline》 à Reine Qulanとなっており、クラン妃の諸祭祀のうち、「ブルガン・ホトク」の儀礼に関するテキストであることがあきらかである。

以上5つは、すべてクラン妃の祭祀に関するテキストである。クラン妃の祭殿オールドは、かつてジャサク旗領内にあった。したがって、私は、クラン妃に関する諸テキストは、「ジャサク旗の(祭祀用?) 冊子」に収録されていたのではないかと推測している。

9) Qarsi ordu-yin miliyaγud

リンチンが第Li番にしているこのテキスト (Rintchen 1959b:107-108) は、「祭殿オールドを祝福する」儀礼に関するものである。八白宮のうち、どの祭殿オールドに関するものかは、不明である。テキストの最後には、「8月の祭殿オールドを祝福する書終わり」(Naiman sar-a-yin qarsi ordu miliyaqu sudur tegüsbe) とある。「祝福の儀礼」がおこなわれるのは、陰暦5月で、オールドス暦では8月になる。このテキストを『黄金オールドの祭祀』にある「祝福の祝詞」(miliyaγud-un irügel) や「祝福のウチュク」(miliyaγud-un öcig) と (Sayinǰirγal & Šaraldai 1983:66-75) 比較したところ、異なる点が目立つ。サインジャラガルとシャラルダイも認めているように、「金書」の種類が複数あり、そのなかに収録されている「祝詞」やウチュクなどもそれぞれ微妙に異なる点が存在する (Sayinǰirγal & Šaraldai 1983:75)。根拠の乏しい推測であるが、もし上述の第xxxxiの一部 (Rintchen 1959b:88-90) をチンギス・ハーンと第一夫人ボルテの祭殿の「祝福の儀礼」に関するものであるという前提で想定するならば、この第Li番のテキストが、クラン妃か他の祭殿オールドに関するものである可能性も否定できない。

10) Čaγan sürüg-ün dalalγ-a

リンチンが第Lii番にしているこのテキスト (Rintchen 1959b:108) の最後に、「白い群れ祭における3月21日の招福(儀礼に関する文) 終わり」(Čaγan sürüg-ün qorin nigen dalalγ-a tegüsbe) とある。『黄金オールドの祭祀』に収録されている「チンギス・ハーンの招福の歌」(Sayinǰirγal & Šaraldai 1983:223-225) と比較し、かつ「チンギス・ハーンの招福の歌」を基準とすれば、上述の「ジャムツァラーノとリンチンのテキスト」にある第xxxxi番の最後の欠落箇所 (Rintchen 1959b:91) は、「招福」に関する

る内容であったと判断できよう。

11) Yeke Mongγol kemekü daγun

リンチンが第Liii番にしているこのテキスト (Rintchen 1959b:109) のタイトルは、直訳すれば「大モンゴルという歌」になる。テキストの最後に「大モンゴル (という歌) 終わり」(Yeke Mongγol tegüsbei) とある。サインジャラガルとシャルルダイは、『黄金オルドの祭祀』にこれとほぼ同じようなテキストを収録しており、それを「大きい歌」(yeke daγu) とよんでいる。祭祀者ダルハトをはじめ、ジノンやタイジたち全員が一斉に合唱することから、「大きい歌」あるいは「大声の歌」になったと解釈している (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:166-168)。なお、『黄金オルドの祭祀』にある「大きい歌」と「大モンゴルという歌」の両者は、若干の語句の違いはあるものの、ほぼ同じである。

12) Tngri-ner-ün Keleber Yeke Mongγol

第Livから第Lxviiまでは、リンチン自身がダルハトのアユール (Ayür) から聞きとった「天の歌」である。これについては第5章で検討する。

3.6 キョードーの研究

イタリアのモンゴル学者キョードー女史は、1980年代に内モンゴルで留学していたころから、チンギス・ハーン祭祀に興味をもち、その後一連の研究発表をおこなっている。キョードーは、主として内モンゴル社会科学院図書館に保存されている資料とロシア連邦サンクト・ペテルブルクの東洋学研究所にあるジャムツァラーノのコレクションを利用している (Chiodo 1989/1991:190-220; 1993:84-144; 1994:175-225)。女史の手元にはモスタールトがオルドスで収集した資料もあり、それをオルドスの『オルドス文化遺産』第2号に提供している。間接的ではあるが、ホルチャバートル経由で私も一部コピーをみることができ、上節で検討したとおりである。女史には心から感謝している。

キョードーはまず、「ボクド・チンギス・ハーンの祭祀の書」(Boγda Činggis Qayan-u Takil-un Sudur) を2回にわたって公表している (Chiodo 1989/1991:190-220; 1993:84-144)。この「ボクド・チンギス・ハーンの祭祀の書」は、1958年11月に内モンゴル社会科学院のドルンガ (Dorongγ-a) によって、ウラン・チャブ盟ダルハン・ムー・ミンガン旗にあるハブト・ハサルの祭殿近くから発見されたものである (Chiodo 1989/1991:190)。

文書は「夏の湖の祭祀」(jun-u naγur-un takil)、「秋の口枷の祭祀」(namur-un sirgü-yin takil)、「冬の皮綱を捧げる祭祀」(ebül-ün tasam-a talbiqui-yin takil)、「春の白い群れ祭祀」(qabur-un čaγan sürüg-ün takil) という4つの部分からなっている (Chiodo 1989/1991:191)。そのうち、「夏の湖の祭祀」を1989/1991年号に (Chiodo 1989/1991:190-220)、「秋の口枷の祭祀」を1993年号に公表している (Chiodo 1993:84-144)。「冬の皮綱を捧げる祭祀」と「春の白い群れ祭祀」は1993年の論文のなかで、写真で公表しているものの、破損がひどいのが印象的である。

文書のなかには、チンギス・ハーン祭祀に供物を捧げる諸クラン集団の名称が記録されている。ナイマン・オトク・チャハル、シブーチン、タタール、ケムジグート、シャラグル (シャル・ウイグル) などの集団名から、キョードーはこの文書を、16世紀の後半から17世紀前半のあいだに書かれたのではないかとみている (Chiodo 1989/1991:192-195)。ホルチャビリクは、文書はかつてチャハル万戸が主宰していたチンギス・ハーン祭祀に関するものであらうとみている (Qurča 1988:112;119)。キョードーもホルチャビリクの説に賛同し、文書はオルドス以外の地域にもチンギス・ハーンを祭る場所が存在していた可能性を示唆しているという (Chiodo 1989/1991:194)。

キョードーは、内モンゴル社会科学院にある「金書」に言及しつつ、文書の中心的内容は、ハーン自身がどのようにチンギス・ハーン祭祀における諸儀礼をとりおこなうかに関するものであると解釈している (Chiodo 1989/1991:194)。私も、基本的にはキョートーの意見に賛成する。他の「金書」は、「祝詞」や「祈祷文」類にまじって指針的内容が入るという構成であるのに対して、「ボクド・チンギス・ハーンの祭祀の書」は、文書全体が指針的内容からなり、諸儀礼の進行を詳細に語る点は、他のどの「金書」にもみられない大きな特徴である。

キョードーはその後、チンギス・ハーンの「九駿」と称する9人の側近に関する「イケ・ウチュク」と「イケ・トゥゲル」にある記述をとりあげ、モンゴルの年代記とも比較する研究をおこなった。その際、サインジャラガルとシャラルダイが『黄金オルドの祭祀』に収録した「イケ・ウチュク」と「イケ・トゥゲル」、ダムディンスレンの『文学百篇』に収録されている「イケ・トゥゲル」、リンチンのテキスト集にある「イケ・トゥゲル」、ジャムツァラーノが1910年8月28日にオルドスのエジン・ホローで書きうつした「イケ・トゥゲル」などを比較している (Chiodo 1994:175-225)。

「金書」を年代記と比較するキョードーの研究は、きわめて緻密な作業にもとづいている。気になるのは、キョードーはそもそもウチュクとトゥゲルとが異なった性質をも

つという点に無関心なようである。サインジャラガルとシャラルダイによると、トゥゲルは、「夏の湖」祭のときにのみ唱える。どの「金書」でもトゥゲルとウチュクは別々になっており、混合したことはないのである (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:103)。ダルハトたちは、トゥゲルとウチュクは、まったく異なった性質をもつことを強調している。ウチュクは、「チンギス・ハーンの歴史」を語るもので、ついでに「九駿」の事績も表れる。しかし、それはあくまでも「チンギス・ハーンの歴史」を語るために「九駿」について触れているにすぎない。一方、「トゥゲル」は、英雄功臣たちに大ハーンからの「恩賜」を下賜するときに唱えるものである。その際、それぞれの功績を述べて、その功績にもとづいて「恩賜」を与える。これは、英雄功臣たちがチンギス・ハーンのために立てた功績であり、チンギス・ハーンとの連帯を示すものでもある。両者とも本来は口頭で伝えられていることも加わり、当然、語句の面で似かよった表現もある。表現上の類似は、決して本質上の相違を希薄にするものではない。結局、キョードーは、モンゴル人民共和国のダムディンスレンのミスをくりかえしたことになる¹⁹。

3.7 「金書」の多様性

以上、チンギス・ハーン祭祀に関する「金書」の伝播、収集および研究について、年代順に述べてきた。ここで内モンゴル社会科学院図書館にある「金書」について触れておきたい。さまざまな理由で、外国の研究者たちはこの「金書」を利用できないのが現状である。私は、この「金書」をよく利用する研究者、同社会科学院のホルチャビリックにインタビューした。ホルチャビリックによると、社会科学院所蔵の「金書」は、1960年代にエドエケシク (Edükesig) が八白宮から書きうつしたものであり、「金書」には諸種の祈祷文や祝詞類をはじめ、「天の歌」も含まれている。この「金書」の最後には、「康熙61年に書写した」という語句があるという。一方、サインジャラガルも、1960年代にモンゴル学者エドウケシクとエルデンタイが康熙年間の「金書」を書きうつしたとの情報を提供している (Sayinjiryal 1990:140)。たしかに、エルデンタイは『モンゴル秘史』を研究する際、随所に「金書」を引用している。詳しいことはあきらかではないが、そのうち「大ウチュク」は、1962年12月15日にエジン・ホローの八白宮から書きうつしたという (Eldengtei & Ardaĭab 1986:1035)。

¹⁹ この論文で私の興味をひいたのは、ジャムツァラーノ自身が書きうつした「イケ・トゥゲル」をそのまま写真版で公表していることである。

「金書」の収集と研究を回顧することにより、以下のことがあきらかになった。

第一、「金書」には複数の種類があった。少なくとも1つの祭殿オールドに1種の「金書」があったにちがいない。あるいは、1つの祭殿オールドでも、1年間を通して多くの儀礼がおこなわれており、儀礼ごとに「金書」が存在していたことも、否定できない。そのため、いままで多くの研究者が異なる「金書」を目にしていたのであろう。

第二、文書には、「金書」であることを明確に示すものと、示さないものがあった。「金書」と書いているかどうかを問わず、祭祀者ダルハトたちは、それらを一括して「金書」とよんでいた事実がある。

第三、モスタールトをはじめ、ジャムツァラーノやリンチンら多くの研究者が収集した諸「金書」の内容は、それぞれ異なっている、それらを総合してみると、「金書」はきわめて豊富な内容を集積していたことはあきらかである。八白宮だけでなく、オールドス地域にあったすべての祭祀に及んでいたものであろう。

4 本研究であつかう2種類の「金書」

4.1 オーノス本「金書」

4.1.1 オーノスという人物

現在内蒙古自治区フフホト市在住のオーノス (Oyonos 1998年現在69才、写真1) は、オールドス地域ウーシン旗出身の文化人である。ここ数年、私がオールドス地域で調査をおこなった際、とくに難しい問題になると、現地の人がみな口をそろえて「オーノスに聞いた方が良い」というほどである。以下では、オーノスについて簡単に紹介しておきたい。

オーノスという個人名は、「オーノス」という、かれ自身が属する父系親族集団 (oboy) 名に由来する。オーノス部は、オールドス地域ウーシン旗における1大父系親族集団である (楊 1996:667-679)。みずからの父系親族集団名を個人名に冠したことから、オーノスという人物の伝統文化に対する態度をうかがいしることができよう。

オーノスは、1943年に14才の若さでウーシン旗旗兵に参加した。1945年に共産党の根拠地となっていた陝西省北部の延安に赴き、民族学院に入学する。民族学院は、

モンゴル族や回族など少数民族出身者を対象とした教育機関であった。1947年8月にオーノスは共産党員になる。1949年、オーノスは共産党の幹部としてオルドス地域にもどり、長い戦乱を経た故郷の再建に携わるようになる。オーノスは主として文化復興を担当し、多くの知識人にあい、インタビューすると同時に、文献収集も積極的におこなった。

オルドス・モンゴル族の文化を心から愛し、文化復興に執念を燃やしていたオーノスは、次第に政治闘争の犠牲になっていった。1955年に「胡風反党集団」の1員とされ、批判闘争を受けるようになる。それでも、1957年4月、オーノスはチンギス・ハーンの祭殿八白宮が置かれていたエジン・ホロー地域で調査をおこなった。八白宮に収蔵されていた膨大な文献がオーノスの注意をひいた。オーノスが私に提供した「金書」は、この年に祭祀者ダルハトがオーノスのためにオリジナル文書から書きうつしたものである。祭祀者ダルハトのなかで、オーノスの重要なインフォーマントになっていたのは、アユール (Ayür) であった。アユールは、リンチンのインフォーマントでもある。

1966年に「文化大革命」が起これと、「内モンゴル人民革命党」党員とされ、毎日拷問を受ける長い苦難がはじまる。オーノスが収集した文書類は没収され、フフホト市内の公衆便所に運ばれたあと、ちり紙として使われた。いまに伝わる「金書」と「天の歌」は、危険を冒して隠しとおしたものである。1976年に「名誉回復」が実現され、1981年から1983年までは内蒙古大学の党副書記をつとめた。

4.1.2 オーノス本「金書」の性質

オーノスの依頼を受けた祭祀者ダルハトは、幅17.7cm長さ25.7cmの「複写信箋」という当時市販のノートに万年筆で「金書」を書きうつしている。現存のノートは、12頁からはじまっており、ページ番号も万年筆書きである。オーノスが、祭祀者ダルハトに12頁まで使いかけたノートを渡して謄写させたのか、それとも、ダルハトは1頁から使用し、12頁までの部分が紛失したのかは、オーノス自身も記憶していない。オーノスの調査ノートには、私に提供した「金書」以外に、もう1種の「金書」に関するインタビュー記録がある。そのもう1種の「金書」の収録内容は、私に提供した「金書」内容とはかなり異なっていた。この情報からも、八白宮内に複数の「金書」が存在していたことはあきらかである。私は、オーノスが提供した「金書」の重要性を強調し

ておきたい。なによりもまず、この「金書」は、ダルハト自身が書きうつしたものである。また、内容的にも、全部で14項目にもおよぶ。たとえ欠落があったとしても、この「金書」の質の高さを損なうことはない。転写にあたって、【 】内の漢数字は、オリジナル・ノートにあったページ番号を意味し、ローマ数字は行数を表す。句読点は、オリジナルにしたがう。オーノス本「金書」の14項目は、以下のとおりである。

- 1) Qar-a sülde-yin takilγan öčig (【十二】1～【十六】11)
- 2) Doluduyar sarayin arban dörben-e baγ-a doγsiγulun öčig
(【十七】1～【二十】13)
- 3) Yeke doγsiγulad öčig (【二十一】1～【二十三】10)
- 4) Alaγ sülde-yin sang (【二十四】1～11)
- 5) Alaγ sülđen takilγa-yin öčig (【二十五】1～【二十六】10)
- 6) Isi qatun öčig (【二十七】1～【二十九】3)
- 7) Isi qatun ejin-ü γal-un öčüg (【二十九】4～【三十一】3)
- 8) Yeke buyantu (【三十一】5～【三十二】11)
- 9) Činggis qaγan-u yeke altan tügel (【三十三】1～【四十七】9)
- 10) Altan ordu-yin miliyaγud (【四十八】1～【五十】7)
- 11) Dörben čaγ-un qorim (【五十一】1～【五十二】7)
- 12) Yeke alba (【五十二】8～【五十三】5)
- 13) Ejen-ü kereg-ün qauli (【五十三】6～【五十四】2)
- 14) Altan Bičig-i sinedken tungγan bičigsen-ü tuqai (【五十四】3～4)

オーノスが提供した「金書」の最後(【五十四】3～4)に、「大清国康熙61年秋の最初の月(すなわち陰暦7月)に、チンギス・ボクドの『金書』を新たに書写した」(Dayičing ulus-un Engke Amuγulang-un jiran nignedüger on-u namur-un terigün sar-a Činggis boyda-yin Altan Bičig-i sinedken tungγaγaba)とある。

オーノス本「金書」は、書写の年代が「康熙61年」(1722)であるという点で、現在内モンゴル社会科学院にある「金書」と、エルデンタイが1962年12月15日に書きうつし、『モンゴル秘史』研究にも参考にした「金書」と共通していることがわかる。

4.2 ウランバートル本「金書」

1997年8月、私はウランバートル市内にある国立中央図書館で1冊の「金書」をみることができた。黄布のカバーに青布で裏打ちし、図書館の整理番号は1936/96である。黄布のカバーは図書館側がつけたものと考えられる。幅25.4cm、長さ27cmで、麻紙という中国製の紙63枚からなっている。左綴じの冊子本で、表紙に「ボクド・チンギスのウチュク」(Boγda Činggis-un öčig orusibai)とある。この「金書」の一番最初の内容が「ボクド・チンギスのウチュク」であることから、整理者はこの1句を冊子全体のタイトルに採用したのであろう。

「金書」の内容は、4枚目からはじまり、表裏両方に書いてある。転写するにあたって、私は4枚目を【一】とする。ローマ数字は行を意味する。各部分のタイトルは、オリジナル・タイトルがあるものは、それを採用した。オリジナル・タイトルがない場合は、文中の内容を検討し、『黄金オルドの祭祀』やリンチンのテキスト集(Rintchen 1959b)などと比較したうえ、私がつけたものである。「金書」の項目は、以下のとおりである。

- 1) Boγda Činggis-un öčig orusiba. (【一】1～【七】1)
- 2) γolumta-yin öčig (?) (【九】1～【十一】7)
- 3) Sačuli-yin nige jüil (?) (【十一】8～【十九】3)
- 4) Qutuγtu yeke qurim-un tügel (【二十一】1～【三十四】11)
- 5) Qar-a sülde-yin öčig orusiba (【三十七】1～【三十七】13)
- 6) Ejen sülde-yin sang orusiba (【四十三】1～【四十六】8)
- 7) Sülde-yin sang (【四十六】9～【五十二】6)
- 8) Boγda Činggis-un öčiγ orusibai (【五十三】1～【五十九】3)
- 9) Qar-a sülde-yin takilγ-a (【六十一】1～【六十三】3)
- 10) Naiman költü čaγan sülde-yin takilγ-a (【六十三】4～【六十七】9)
- 11) Sülde tngri takiγ sang ene orusiba (【六十七】10～【七十四】2)
- 12) Faril-un daγudalγ-a (【七十七】1～【八十五】3)
- 13) Yere yisün čaγaγčin-u sün sačulγan-u irügel (【八十五】4～【八十九】6)
- 14) Altan Bičig-i sinedken tungγan bičigsen-ü tuqai
(【八十九】7～【九十一】2)
- 15) Čaγan sürüg sačuqui yosun (【九十三】1～【九十四】12)

- 16) Jēgesü-yin irügel (【九十四】5~11)
- 17) Qoni manduqu irügel (【九十四】11~【九十五】5)
- 18) Miliyaγud-un irügel (【九十五】6~【九十九】8)
- 19) Dalalγ-a-yin tuqai (【九十九】9~【百】7)
- 20) Naγur-un yosun (【百】11~【百八】5)
- 21) Altan Debter-i Bičigsen-ü tuqai (【百八】6~【百八】8)
- 22) Suu-tu ejen qatun-i altan qarsi-yin dotur-a bariγči saba-yin toγ-a
(【百九】1~【百九】11)
- 23) Darqad-un γar-tu bayiqu saba-yin toγ-a (【百九】12~【百十】7)
- 24) Yeke qurim-un yosun-ü nige tasurqai? (【百十一】1~14)

この「金書」をいつ、誰がいかなる経緯でウランバートル市内の国立中央図書館に運んだかなどの情報は一切ない。筆跡が美しく、欠落部分がないことから、きわめて価値の高い「金書」の1種であると判断している。【四十六】頁8行の箇所「メルゲン・ゲゲンが創作し、ダルハトの長官であるナソンチョクトの書から謄写した」(Mergen gegen jōkiyabai.darqad-un daruγ-a Nasunčoytu-yin bičig-eče salγaba.)とある。リンチンが1959年に公表したテキスト(Rintchen 1959b)にはこのような内容がなく、リンチンの使用した「金書」とは異なるものであろう。

ダルハトの長官ナソンチョクトと接触していた研究者の1人は、ジャムツァラーノである。ジャムツァラーノは、1910年4月7日に八白宮のあるエジン・ホローに到着した。長旅の疲れからか、病に倒れ、5月5日までナソンチョクトの家で滞在した。ジャムツァラーノは最初ダルハトたちから「ロシア人」とみられ、「金書」をみることも許されなかった。そこで、ジャムツァラーノはナソンチョクトに「歴史」、とくにチンギス・ハーンの「歴史」を語った。ナソンチョクトは、ジャムツァラーノが「ロシアのチャガン・ハーンの使者ではなく、モンゴル族学者である」ことを認める。その後、チンギス・ハーンに参拝することを許されたジャムツァラーノは、みずからの目的をチンギス・ハーンの御前で報告する。「私は、貴方(チンギス・ハーン)の母方の故郷から来た者である。貴方の母親はホリー・ブリヤートの人である。私の生まれた故郷はデリュン・ボルダクから遠くないバートル・ウーラにある。いまやロシアのチャガン・ハーンに占領された。これはもともとジョチ、チャガタイのウルス(国)である。貴方の歴史を研究するために来た。歴史を教えてください、ダルハトに命令してください。……」とジャムツァラーノが許しを乞う。チンギス・ハーンの許可を得る

ことのできたジャムツァラーノは、「金書」を書きうつすことに成功する (Жамцанпано 1961:200-203)。ここで、とくに興味深いのは、ジャムツァラーノが「歴史」を語って、ダルハトたちの信頼を獲得したという点であろう。

キョードーは、1994年の論文のなかで、ジャムツァラーノが1910年8月28日にエジン・ホローで書きうつした「イケ・トゥゲル」の写真を公表している (Chiodo 1994:175-225)。写真をみるかぎり、ジャムツァラーノの書きうつした「金書」と、ウランバートル本「金書」との筆跡が異なっていることはあきらかである。

根拠はないが、私は、ウランバートル本「金書」は、オルドス・モンゴル人の手によるものであるとみている。外モンゴルからの学者で、ナソンチョクと親交のあったジャムツァラーノがこのウランバートル本「金書」を運んだ可能性は否定できない。おそらく、ナソンチョクトの配下にある別のダルハトがジャムツァラーノのために書きうつしたのであろう。

ウランバートル本「金書」は、ダムディンスレンが言及した3種の「金書」のうち第2番目の「金書」である可能性もある。書写ミスが多く、「ボクド・チングスのウチュク」 (Boγda Činggis-un öčig orusibai) というタイトルのついた「黄色い冊子」である (Damdinsürüng 1982:294)、という点で一致しているからである。

5 「天のことば」で書かれた「天の歌」

一部の「金書」、たとえば内モンゴル社会科学院所蔵の「金書」には「天のことば」 (tngri-yin kele) で書かれた「天の歌」 (tngri-yin daγu) が収録されている。「天のことば」は未知言語とされている。本章では、「金書」の重要な1部分である「天の歌」をとりあげる。まず、「天の歌」に関するリンチンの調査報告をとおして1950年代における祭祀状況を回顧する。つぎに、オーノスが1957年に祭祀者ダルハトより収集した「天のことばによる歌」というテキストを呈示する。最後に私自身の調査資料にもとづいて、1990年代現在における「天のことば」でうたう「天の歌」の実態を報告する。

5.1 「天の歌」に関する従来の研究

「天のことば」で書かれた「天の歌」はまた「天の12の歌」 (tngri-yin arban qoyar daγu)、「チャルキの12の歌」 (čargi-yin arban qoyar daγu) などとよばれる。チャルキとは、祭祀用の特別な楽器である。「天の歌」をうたうときに楽器チャルキの伴

奏（写真2）は欠かせないことから、「チャルキの歌」と呼ばれるようになったのであろう。一方、リンチンのテキストでは「諸天のことば」（tngri-ner-ün kele）のように、天は複数形（tngri-ner）となっている（Rintchen 1959a:9-22;1959b:109）。

「天の歌」は以前から研究者に注目されてきた。モスタールトは、「天のことば」とは、オルドスのエジン・ホロー地域にあるチンギス・ハーンの祭祀活動において、祭祀者ダルハトによってうたわれる厳粛な祈祷文であるといい（Mostaert 1942:658）、それ以上の詳しい説明はしていない。

ジャムツァラーノはつぎのような説明を祭祀者ダルハトから聞いている。「血のない祭」すなわち酒と灯明で祭るときには「3つの歌」をうたい、ヒツジで祭るときは「6つの歌」を、ウマで祭るときには「12の歌」をうたう。歌の内容は「秘密」であり、意味は解されておらず、他人に教えると狂うという（Жамцарано 1961:201-203）。

オルドス地域の伊克昭盟档案馆から出版された『成吉思汗八白室』第七輯に「12の歌」を収録している（Narasun & Erdemtü 1987:31-34）。私が内モンゴル社会科学院の研究員ホルチャビリクに確認したところ、この「12の歌」は、1960年代にエドゥケシクがエジン・ホローから書きうつした「金書」のなかの「12の歌」のゼロックス・コピーであるという。

「天のことば」でうたう「天の歌」について、諸研究者のなかでも、とりわけモンゴル人民共和国のリンチンが詳しい記述報告を残している。以下ではリンチンの報告（Rintschen 1959a:9-22）にもとづいて、1950年代における「天の歌」をとりまく実際の状況を再現してみたい。

5.2 リンチンの調査

リンチンは、1957年夏にオルドスの八白宮を訪れている。さまざまな祝詞と賛歌を聞き、書きうつすため、リンチンはすべてのモンゴル人と同じように、八白宮に酒と餅からなる供物を捧げた。7人のダルハトはモンゴルの伝統衣装をまとい集まった。リンチンは、祭殿の前に敷いた白いフェルトのうえにひざまずいた。ダルハトはリンチンに儀礼用の絹布、灯明、香それに皿を渡した。リンチンはそれらを供卓に捧げた。その際、ダルハトは「天のことば」で「天の歌」をうたった。「天のことば」は、満州語、トルコ語、チベット語のいずれにも似ていなかった（Rintschen 1959a:17）。

ダルハトのソンチ（söngči）職はリンチンの右側に立ち、銀皿に銀杯を載せた酒器

²⁰をリンチンに渡す。リンチンはそれを供卓へもって行って捧げた。そのとき、アユールというダルハトが「天の歌」をうたい、他のダルハトたちは唱和した (Rintschen 1959a:18)。

つづいてリンチンは文書館の白宮に行き、そこでダルハトのアユールに調査の目的を説明した。リンチンは、みずからがユンシェーブ (Yöngsiyebü) という父系親族集団 (oboγ) の出身であることを打ち明けた。「ユンシェーブの出自」という自己紹介は、非常に効果があったようである。ユンシェーブとは、歴史上のモンゴルの6つの万戸集団の1つである。チンギス・ハーンの生涯を語る「黄金オルドの大ウチュク」では、「(モンゴルの) 中核たる偉大なユンシェーブ万戸」 (töb yeke yöngsiyebü tümen) とある (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:198) ことも、ダルハトのアユールは当然知っていたのであろう。リンチンはさらに、自分の母親はチンギス・ハーンの直系ボルジギン集団の出身であることも話し、八白宮祭祀に対する学問研究の意義と価値についても説明した (Rintschen 1959a:18)。

リンチンの誠意ある説明にダルハトは感激し、さっそく文書をもってきてみせた²¹。それらの文書を以前にジャムツァラーノもみていた。文書のうち、2つは青い紙に金で書いてあり、馬乳酒の匂いがしていた。多分それは馬乳を振りまいた際についた匂いであろう。テキストには、モンゴルの聖地ケルレン河のことを Kerülen とせずに Kelüren と表記している。Kelüren の方が『モンゴル秘史』など古い歴史記録と一致する (Rintschen 1959a:18)。リンチンはこれによって、八白宮の文書は古い伝統をもっていることをほのめかしている。

リンチンは、「天のことば」を教えるようにと願いでたところ、かつてジャムツァラーノにいったのと同じ返事が返ってきた。アユールは、「天の歌」はチンギス・ハーンに捧げるもので、チンギス・ハーンの許しがあればうたってあげよう、とリンチンにいった (Rintschen 1959a:18)。アユールは、いままで「天のことば」を決して見知らぬ者に伝えなかった。しかし、リンチンは「黄金家族」 (altan uruγ) の出身で、よそ者ではなく、しかも学問のためであるということから、チンギス・ハーンの許しも

²⁰ これはおそらくチャクー (čaγu) であろう。長方形の小さい銀製の皿に銀の酒杯を2つ並べたものである。

²¹ ダルハトたちは、毎年チンギス・ハーンの遺品を携えてモンゴル各地を巡回していた。そのため、かれらはモンゴル族の社会と歴史について幅広い知識をもっていた。私が1991年から1992年にかけて、八白宮で調査をおこなった際も、ダルハトから私の父母双方の出自、清朝時代の父祖代々の経歴など詳しく訪ねられたことがある。「歴史」に無知であると判断された場合、ダルハトに無視されるのは事実である。そのため、ジャムツァラーノもリンチンも「歴史」を語ったのであろう。

得られるのであろうといった。翌日の夕方、アユールはリンチンに「チングス・ハーンの許しを得ることができた」と返事したうえ、「天の歌」は、チングス・ハーンの祭壇の前でしかうたわなないとつけ加えた (Rintschen 1959a:19)。

つぎの日の朝、アユールは祭殿の入口でリンチンを迎え、ともに祭殿内に入る。リンチンはふたたびチングス・ハーンに許しを乞うた。アユールはリンチンのそばに立ってうたいだした。リンチンはここでみずからが録音機を携帯しなかったことを後悔しながら、筆記をはじめた。アユールの歌はリズムが早くてついていけない。やむを得ずとばしたところもあり、くりかえされる度に少しずつそれをおぎなっていた。それでも何カ所かは不明のままのこった。そのうちアユールは疲れてきて、省略しながらうたうようになった。最初は「天のことば」でうたっていたが、最後はモンゴル語でうたった。このときはすでに午後3時になっていた (Rintschen 1959a:19)。リンチンの聞きとった「天の歌」は大きな収穫となった (Rintschen 1959a:21-22)。後日リンチンがジャムツァラーノの収集した文書を整理公表した際にも、みずからが入手した文書と聞きとりによる「天の歌」を再録している (Rintschen 1959b:109-113)。以下はリンチンが聞きとった「天の歌」の項目である。

1) Tngri-ner-ün keleber yeke mongγol.²²

2) Baγ-a Mongγol.²³

3) Ajú hǎn.²⁴

4) Ui biliyá.²⁵

5) Alaló.²⁶

6) Üilen jüxüi.²⁷

²² リンチンが第Liv番にあげているこのテキストのタイトルは、直訳すれば「諸天のことばによる大モンゴル」の意味である。これは、『黄金オルドの祭祀』に収録されている、チャルキチ職のグルジャブのうたった「大モンゴル」とは、共通点が多くみられるものの、グルジャブの歌は短い。歌の意味はまったく解説されていない。

²³ リンチンが第Lv番としているこの歌のタイトルは、「小モンゴル」との意味である。『黄金オルドの祭祀』にはチャルキチ職のグルジャブのうたった「小モンゴル」を収録している。両者は似ている点が多い。歌の意味は不明である。

²⁴ リンチンが第Lvi番としているこのテキストは「天の歌」の1つで、その意味は不明である。『黄金オルドの祭祀』には収録されていない。

²⁵ リンチンが第Lvii番としているこのテキストは「天の歌」の1つで、その意味は不明である。『黄金オルドの祭祀』には収録されていない。

²⁶ リンチンが第Lviii番としているこのテキストは「天の歌」の1つで、意味は不明である。『黄金オルドの祭祀』には収録されていない。

²⁷ リンチンが第Lix番としているこのテキストは「天の歌」の1つで、意味は不明である。『黄金オルドの祭祀』には収録されていない。

7) Iliyá ló.²⁸

8) Hoi.²⁹

9) Ĵavá.³⁰

10) Ĵerge.³¹

11) Šira Ĵele.³²

12) Yeke buyantu.³³

13) Qooγčín emegen.³⁴

14) Ĵumursu.³⁵

アユールが最後にモンゴル語でうたったのは、多分第Lxv番目の「イケ・ブヤント」(yeke buyantu)と題するテキストであろう。ただし、この「イケ・ブヤント」は、第Liii番目の「大モンゴルという歌」の冒頭とほぼ同じである³⁶。

ダルハトのアユールがリンチンに語ったところでは、「天の歌」はいつもただ1人にしか伝えないという。後継者を選ぶ際は、その人がさらに後世の後継者に「天の歌」を伝達する能力があるかどうかを基準とする。アユールは、かれの叔父でジャムツァラーノのインフォーマントであったナソンチョクトから教わっている。アユールは「天

²⁸ リンチンが第Lx番としているこのテキストは「天の歌」の1つで、意味は不明である。『黄金オルドの祭祀』には収録されていない。

²⁹ 「天の歌」の1つで、リンチンは第Lxi番としている。その意味は不明である。『黄金オルドの祭祀』には収録されていない。

³⁰ 「天の歌」の1つで、リンチンは第Lxii番としており、意味は不明である。『黄金オルドの祭祀』には収録されていない。

³¹ 「天の歌」の1つで、リンチンは第Lxiii番としており、意味は不明である。『黄金オルドの祭祀』には収録されていない。

³² 「天の歌」の1つで、リンチンは第Lxiv番としている。テキストのタイトルは「黄色い綱」との意味であろうが、その内容は解説されていない。『黄金オルドの祭祀』には収録されていない。

³³ リンチンが第Lxv番にしているこのテキストは、「天の歌」の一部とみられる。内容的には第Liii番の「大モンゴルという歌」(Yeke Mongγol kemekü dayun)に近い。サインジャラガルとシャルルダイは、グケチン職のバトオチルなどの人たちは、「大きい歌」をうたうときに、ダルハトのグルジャブと異なつたうたい方をしていると記している。その異なつたうたい方の冒頭部分がリンチンの第Lxv番の「イケ・ブヤント」と似かよっている。したがって、『黄金オルドの祭祀』の記述(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:168)に依拠すれば、リンチンの第Lxv番の「イケ・ブヤント」は、本来なら第Liii番の一部であると判断できよう。

³⁴ リンチンが第Lxvi番にしているこのテキストの内容は1行だけで、意味不明である。タイトルにあるemegenとは「老女」の意味である。ジャムツァラーノは「ホーチン老女」を『モンゴル秘史』に登場する「ホワチン老女」(Qovaγčín emegen)と結びつけている。陰暦3月20日のガリル祭では、この老女にも供物を捧げる(Окамцарано 1961:207-208)。

³⁵ リンチンが第Lxvii番としているこのテキストは「天の歌」の1つで、その内容は不明である。

³⁶ リンチンは日程上その晩に八白宮を離れなければならなかった。出発に際して、リンチンはアユールに後日録音機をもってきてもう一度「天の歌」を聞きたいと申し入れた。アユールは、「チングス・ハーンが許すなら、もう一度うたってあげよう」と返事する(Rintschen 1959a:19)。

の歌」を自分の息子に教えていたが、あいにく息子は死んだ。多分、チンギス・ハーンが息子に教えることに反対したのであろう、とアユールは理解していた。そのため、アユールは1957年当時孫に教えていた。その孫は2カ月間で8つの「天の歌」を覚えたといい (Rintschen 1959a:19)。

リンチンはその際、以前ジュンガル旗旗王の所有となっていた別の「天の歌」の写真をアユールにみせて確認している。リンチンがいつ、どこでジュンガル旗旗王の「天の歌」を入手したかなど、詳細は不明である。ジュンガル旗の「天の歌」は、ジュンガル・エジンと呼ばれる祭殿でうたうものである (Rintschen 1959a:19-20)。いわゆる「ジュンガル・エジン」とは、チンギス・ハーンの妃で、イエスウイ妃とイエスウガン妃の姉妹を指す。

アユールはリンチンに、ジュンガル旗の「天の歌」とみずからがチンギス・ハーンにうたう「天の歌」とは、異なったものである、と主張した。ジュンガル・エジンの前でうたう「天の歌」をアユールは知らなかったのである (Rintschen 1959a:20-21)。

リンチンがみたジュンガル旗の「天の歌」には、ことばの後ろに波線がついており、それは転調を表すものであろうという。波線は、チベット文学においてメロディーを表現するのに使用される手法の1つで、「天の歌」は、チベットの影響を受けている可能性があるという (Rintschen 1959a:21)。また、アユールのうたった「天の歌」には、「ウーホァン」(u-huan) ということばがでてくる。「ウーホァン」は、中国の古い文献にみられる民族名を思いださせる。「天の歌」は、チベット語の古い方言ではないかと推測している (Rintschen 1959a:20-21)。

5.3 オーノスの「天のことばによる歌」(Tngri-yin kelen-ü dayun orušiba)

オーノスはまた私に「天のことばによる歌」という文書を提供した。祭祀者ダルハトたちは通常これを「天のことば」で書いた「天の歌」、「12の歌」などと表現する。この文書も上述の「金書」と同じく1957年に祭祀者ダルハトから収集したものである。

文書は、大きさ23cm×21.5cmの中国製「麻紙」からなる冊子本である。長方形の紙を2つ折にして左を綴じている。表紙には「天のことばによる歌」(Tngri-yin kelen-ü dayun orušiba) というタイトルがあり、内容はその裏からはじまる。鉛で線を引き、1頁に8行の文字がある。本研究で文書をテキストとして公表するにあたって、オリジ

ナル文書にあったモンゴル語ページ・ナンバーを【 】で表す。表面をa、裏面をbとする。ローマ数字は行を意味する。以下は、オーノスが私に提供した「天のことばによる歌」の項目である。

- 1) Yeke Mongγol-un daγu (【一】 1～【二】 a:5)
- 2) Jomursu (【二】 a:6～【二】 b:7)
- 3) Tertey-e (【二】 b:8～【三】 b:2)
- 4) Üigen (【三】 b:3～【四】 b:3)
- 5) Qabarγ-a (【四】 b:4～【五】 a:5)
- 6) Küikü (【五】 a:6～【五】 b:8)
- 7) Jaγal (【六】 a:1～【六】 b:8)
- 8) Törlüge (【七】 a:1～【七】 a:2)
- 9) Jaba (【七】 a:3～【七】 b:5)
- 10) Sar-a jile (【七】 b:6～【九】 b:7)
- 11) Törülge (【九】 b:8～【十】 a:2)
- 12) Qorγuljai (【十】 a:3～【十】 b:7)
- 13) Jerge (【十】 b:8～【十一】 a:5)

以上8番と11番のタイトルTörülgeが重複していることから、全部で13となっている。

5.4 「天の歌」をいつうたうのか

サインジャラガルとシャラルダイは、その共著『黄金オルドの祭祀』のなかで、「天の歌」がいつ、どのような儀礼のときにうたわれるかについて、断片的ではあるが、比較的詳細な記述を呈示している。

サインジャラガルとシャラルダイは、八白宮の正月の祭祀について言及したところで、「祭祀の順次」(tayilγ-a-yin darumji) という文書を引用している。それには、つぎのような内容がある (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:29)。

正月1日の祭祀において、まず儀礼用の絹布を献上する。灯明を献上する。ヒツジの丸煮を献上する。献香(の祝詞)を詠む。火を祭る。「10のヤム」を分配する。大ウチュクを唱える。酒を献上する。「12の歌」をうたう。ヤムを分配する。……

儀礼用の絹布、灯明、供物丸煮、香などの献上は、八白宮のすべての祭祀にみられる共通した儀礼である。その際、献上した供物丸煮を少し切りとって火のなかに入れ、これが「火を祭る」儀礼である。つづいて丸煮の一部を恩賜として祭祀者一同に分けあたえる。この恩賜をヤムとよぶ。チンギス・ハーンの生涯を語るウチュクを唱える。ふたたび献酒し、「天のこつば」による「天の歌」すなわち「12の歌」をうたう、という順番となっている。

「祭祀の順次」に記されている儀礼の順番が、八白宮祭祀の本来の姿であった。現在八白宮の大小さまざまな祭祀では、「エジン・サン」という賛歌をうたうようになった。これは、チベット仏教の浸透結果である (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:29-30)。本来は「天の歌」をうたうべき儀礼においても、現在は代わりに「エジン・サン」が登場したことになる。

八白宮祭祀のうち、もっとも盛大におこなわれる陰暦3月21日の「白い群れ祭」でも「天の歌」がうたわれる。これについて、上述の「祭祀の順次」につぎのような詳しい指針的内容がある (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:141)。

(陰暦) 3月21日の祭祀においてまず儀礼用の絹布を献上する。灯明を献上する。香を献上する。3回献酒する。ジュースを漬す (jegesü singgegen-e)。祈祷用ヒツジの賛歌を唱う。ヒツジ占いをする。綱³⁷のところへ赴いて馬乳を振りまく。「小祭」(baγ-a tayilγ-a) は以上である。「大祭」(yeke tayilγ-a) がはじまる。まず儀礼用の絹布を献上する。灯明を献上する。香を献上する。ヒツジの丸煮を献上する。香 (の祝詞) を詠む。ホンハ³⁸ (qongq-a)、シンケ³⁹ (singge)、ハトクール⁴⁰ (qadquγur) を献上する。炉を祭って恩賜を分配する。大ウチュクを唱える。献酒しながら「12の歌」をうたう。…… (中略) 「大祭」は以上である。

以上の記録から、この日、「99頭の白いウマの乳を振りまく」儀礼が開始されるまでの儀礼を「小祭」とよび、それとは別に祭殿オールドでおこなわれる儀礼を「大祭」とよんでいることがわかる。両者はいずれもジノンが主宰することになっているが、「天

³⁷ ウマをつなぐ「永久なる綱」のことを指す。

³⁸ 祭祀用酒器の1種である (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:16)。

³⁹ シンケとは、祭祀用のヒツジの丸煮を煮たあとの汁のことを指す。また、この汁をすくう容器を指すこともある。一部の地域ではシンケとは乳製品の1種を意味する (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:19)。

⁴⁰ 1種の祭祀用のフォークであろう。

の歌」は「大祭」のときにうたわれるため、ここでは主として「大祭」をとりあげてみよう。

3月21日の祭祀は辰時から始まる。ジノンはチンギス・ハーンの直系子孫たちを率いてまず「99頭の白いウマの乳を振りまく」儀礼をはじめ。馬乳を振りまく儀礼が始まると、ジノンはただちにチンギス・ハーンと第一夫人ボルテ妃の「黄金オルド」に赴く。この際、他のチンギス・ハーンの直系子孫たちからなる「継承人⁴¹」たちはチンギス・ハーンの第二夫人クラン妃をはじめとする他の祭殿に入る。祭祀者ダルハトとチンギス・ハーンの直系子孫たちが共同主宰する「大祭」が一斉にスタートする (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:143;157)。

まずは祈祷用のヒツジの耳もとで願いを語る。ダルハトのガルチ職がヒツジを屠殺し、その内臓をとりだして占いをおこなう⁴²。ヒツジ占いが終わると、ジノンをはじめ一同はチンギス・ハーンの遺骨箱の前に敷いてあるフェルトのうえにひざまずき、今度は「炉の祭」という儀礼が始まる。火に捧げる供物類はダルハトのトゥール職とチェルビ職が用意したもので、それを参加者全員に配る。一同が供物を火に捧げ、「黄金オルドの炉の大ウチュク」が唱えられる (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:157-164)。

「炉の祭」につづいてジノンはふたたび儀礼用の絹布、灯明、ヒツジの丸煮を献上し、その度にダルハトのグケチン職が祈祷文を唱える。ジノンは「黄金オルド」の祭殿の入口のところで、「マンライラホ」 (manglayilaqu) 儀礼をはじめ (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:164)。マンライ (manglai) とは、もともと「先鋒」、「最上級」の意味である。ダルハトの職掌名にもマンライがある。マンライラホとは、マンライの動詞形である。

「マンライラホ」儀礼でさまざまな祭祀用酒器が登場する。ホンハとは比較的大きい酒樽である。チョルゴト (čorjotu) とはヤカンのかたちをした酒壺である。チャクーとは、銀製の長方形皿に2つのつながった杯を固定させたものである。祭祀のときには、まずホンハのなかの酒をチョルゴトに移し、チョルゴトからまたチャクーに注ぐ。これをダルハトのマンライ職が担当する。

酒の入ったチャクーをマンライ職から渡されたジノンは、このチャクーを額よりも高くもちあげて「黄金オルド」のなかへ入っていく。この際、ダルハトの2人のホンジン職が両側に立ち、1人は馬頭琴を、もう1人はチャルキという祭祀用楽器を奏で、

⁴¹ 「継承人」に関しては、楊 (1997a) 参照されたい。

⁴² 詳しくは利光 (1989:36-46) 参照されたい。

「チャルキの歌」すなわち「天の歌」をうたいはじめる。かつてはジノンにつづいて万戸長、千戸長などが献酒していた。王公たちが酒を捧げているあいだ、「天の歌」はずっとつづく。『黄金オルドの祭祀』には、現在チャルキチ職をつとめるグルジャブのうたっている「天の歌」のなかの「大モンゴル」と「小モンゴル」を収録している (Sayinjiryal & Šaraldai 1983:164-166)。

Yeke Mongγol

E alu,e alu,e aluu
 Quu qan jeküiyi oluralaqai jeküiyjü
 Yovan quvang,e laču qai oluralaqai
 Šajuu jeküiyjü yövi qovang,e
 Oluralaqai ililai iliy-e'ililai
 Yovan quvang uu qai aqalu
 Oluralaqai iler iley-e.

Baγ-a Mongγol

E alu iliyalu quu qai
 Yovan quvang,ileken oluralaqai
 E yovan quvang,e ileliki
 E ilili juu ai aγuluu iliya
 Aquyijuu uyuu alaluu iliyelüü
 Uu qai yovan quvang e ileliki
 Olaralagai iley-e küi.

ダルハトのグルジャブは、上述のリンチンのインフォーマントであったアユールの孫である。1957年にアユールがリンチンに「天の歌」をうたって聞かせたとき、孫に教えていたとも語った (Rintschen 1959a:19)。ここで、リンチンが記録した「大モンゴル」と「小モンゴル」をみてみよう (Rintchen 1959b:109-110)。

Yeke Mongγol

É alalú ,é alalú ,é alalú ,
 Hú hai jexüi alarluhai,
 Jéxüijü júhañjú jé la,

Ĵuhai alarlalai haišú ĵú,
 Ĵéxüi ú uhuañ é alarlohai,
 Elelí iliyá ililí jó huañ,
 Ohai ahúlú ĵailí ĵuhai,
 Ulurlai šĵú ĵélí ĵuhai,
 Olorlahai šĵú ĵélí ĵuhai,
 Olorlahai šĵú ĵéxüiĵü,
 Ĵu uhuañ é olorlohai,
 É lorlohoi ililí iliyá,
 Ilexí jóhuañ óhai ahulu,
 Ahúlú ulurlahai ilerí iliyá!

Baγ-a Mongγol

É alalú iliyálú úhui hua
 Eleheñ alarlahaiñ íhuañ,
 Ei ililixí ĵei ililí ĵú
 Ĵé ilihí ĵú é axúlúñ,
 Iliyá axuiĵú oyú ,
 Axúló iliyálú úhui huañ
 Ilixéñ olorlohai íhuañ,
 É ilirlihí ĵé ililí ĵú ,
 Ĵé ilirlihí ĵú olorlohai
 Iliyá hún!

サインジャラガルとシャラルダイは、ダルハトのグルジャブのうたう「天の歌」は、「金書」の「天の歌」とは異なるものであるという (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:165)。サインジャラガルとシャラルダイは複数の「金書」を引用しており、ここではどの「金書」を指すかは不詳である。サインジャラガルとシャラルダイは「大きい歌」を康熙61 (1722) 年の「金書」から写している (Sayinjirγal & Šaraldai 1983:168) ので、グルジャブのうたう「天の歌」を康熙61年本の「金書」と比較したとみてもよいのではなかろうか。

「天の歌」をうたいおわると、もう1つのチャルキを加え、参加者全員が「大きい歌」(yeke dayu)を斉唱する。この「大きい歌」は冒頭の数行を除けば、モンゴル語からなっている(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:166-168)。リンチンは、ダルハトのアユールは「天のことば」につづいてモンゴル語でうたったと書いている(Rintschen 1959a:19)。アユールがモンゴル語でうたったのは、おそらくこの「大きい歌」であつたろう。

このように、「天の歌」は、「大祭」の一環として「マンライラホ」儀礼の際にうたわれることがわかった。このあとは祭史「大ウチュク」を唱え、恩賜ヤムを分配して、昼間の祭祀が終幕する。

5.5 1992年当時の祭祀状況

5.5.1 3月18日の祭祀

私が調査した1992年4月20日は、陰暦3月(オルドス暦の6月)18日である。朝から曇りで、西からの風が強かった。祭祀者のダルハトたちは、毎年の「春季大祭」にはいつも雨か風に見舞われるという。

1956年5月、中国政府の主導で新しい「チンギス・ハーン陵」が完成する。それまで八白宮はオルドスの各地に分布していた。それらは、年に1回「春季大祭」のときに、チンギス・ハーンと第一夫人ボルテの祭殿がふだん置かれていたエジン・ホロー地方に集まる。その際、陰暦3月17日に到着し翌18日にエジン・ホローのジギと称する駐営地で設営し、21日の大祭を迎えることになっていた(Sayinjiryal & Šaraldai 1983:122-131; 楊 1995:44)。

私は朝6時に「チンギス・ハーン陵」に行ったが、ダルハトたちは誰も来ていなかった。6時25分ごろ、タイボ爵でホンジン職のグルジャブが現れた。かつては日の出と同時に祭祀をはじめていたが、現在では観光客の参拝を考慮して遅くなったという。8時ごろになると、8人のダルハトは全員そろい、丸煮の煮炊きが始まった。政府の規定では、正式のダルハトは8人だけとなっているが、解散させられたダルハトのなかには、みずからの意志で祭祀活動に奉仕する者も何人かいた。

12時40分に丸煮ができ上がり、祭祀の準備もととのった。しかし、自由意志で来ていたダルハトはモンゴル服をもっていなかったので、祭祀ははじまらない。「人民服姿ではチンギス・ハーンの前に出られない」という理由から、モンゴル服を調達しなけ

ればならなかった。

祭祀は13時10分から開始された。祭殿内にはダルハトをはじめ、総計約30人ぐらい集まっていた。そのうち漢族は1人であった。そのときの儀礼は、以下の順でおこなわれた。

1) 儀礼用絹布の献上 (nindar ergüki)

陵のなかにはチンギス・ハーンと第一夫人ボルテの白宮、クラン妃の白宮、イエスウイ妃とイエスウガン妃姉妹の白宮、弓矢の白宮の4つの祭殿が安置されていた。一方、陵の外側には卵白色のウマの白宮、手綱の白宮、「褐色の高きもの」という馬乳酒入れの白宮など3つの祭殿があった。手綱の白宮は、2頭の白黄色ウマと古くから伝わる馬具によって表象されていた。文書館の白宮は陵の東に建っている。これで八白宮を構成する。

ダルハトはチンギス・ハーンと第一夫人ボルテの白宮、クラン妃の白宮、イエスウイ妃とイエスウガン妃姉妹の白宮の扉のところに、弓矢の入ったケースに儀礼用の絹布を飾った。卵白色馬は陵門外の東側に、白黄色馬は西側にそれぞれダルハトのジロチン職が手綱を手にして立っていたが、絹布はウマのたてがみにつけられた。「褐色の高きもの」は桶の縁に絹布をつける。ダルハトのグケチン職をつとめるチョロンバートルが「儀礼用絹布の祝詞」(nindar-un irügel)を唱えた。「儀礼用絹布の祝詞」をまた「儀礼用絹布の祈祷」(nindar-un dayadyal)ともいう。

オルドスをはじめ、内モンゴル各地から参拝に訪れたモンゴル人たちは卵白色馬と白黄色馬に叩頭して祝福(adis)を希求していた。

2) 灯明の献上

灯明の献上は陵の外にある3つの白宮からはじまる。風がつよいため、灯明は灯籠で代用された。陵内の諸白宮にはバターを使った灯明が捧げられた。ここでチョロンバートルは「灯明の祝詞」(jula-yin irügel)を唱えた。

3) ヒツジの丸煮の献上

午前中に用意したヒツジの丸煮を3つ運んできて、陵内3つの祭殿の前にある供卓に1つずつ献上した。このときダルハトのグルジャブは「儀礼用絹布の祝詞」を唱えた。つづいてチョロンバートルは「灯明の祝詞」を詠んだ。私を含め参拝者一同は9回叩頭した。

4) 「炉の祭」

ダルハトたちは丸煮の脂肪尾と脛骨(šay-a čimöge)から肉を小さく切りとって炉

のなかに入れた。肉片をミラグート (milγayud) という。ダルハトのチョロンバートルが「エジン・サン」を詠みだしたところ、参加者全員が大声で朗唱しだした。かつてモンゴル人男性はすべて朗唱できたが、いまや暗記している者は少なくなった。若いダルハトは「エジン・サン」のパンフレットを配っていた。「エジン・サン」のつぎに「スウルデ・イン・サン」を朗唱した。

5) チョロンバートルが「小ウチュク」を唱える

ウチュクは「チンギス・ハーンの歴史」であるため、秘密を守ることから、はっきり詠まないようにする。最後には祭祀の主宰者として現在生存している8人のダルハトと自由意志で祭祀に参加したダルハトたちの名を唱えた。私には、この8人の名前と、ときどきでてくる「チンギス・ハーン」ということば以外ほとんどなにも聞きとれなかった。

6) 献酒の儀礼 (tabiy tabiqu)

参拝者一同は主殿内西側の壁に近いところで整列する。若いダルハト2人が酒器チャクーとチョルゴトをもってきてチョロンバートルに渡す。チョロンバートルはチョルゴトから酒をチャクーに入れて年配の参拝者に渡す。年配の参拝者は両手でチャクーを高くもちあげて供卓の方へ進む。この献酒の儀礼をまた「マンライラホ」ともいう。「マンライラホ」にあわせてダルハトのグルジャブが「天のことば」で「天の歌」をうたいだした。グルジャブは楽器チャルキを奏でながらうたい、その息子は傍らで「天の歌」を書いたノートをみながらうたう (写真2)。グルジャブの息子もすでにダルハトとなり、見習い中であった。年配の参拝者がゆっくりと酒をもって約3メートル先の供卓に着くころ、グルジャブもちょうど「天の歌」の1段落をうたいおえる。供卓の側で立っていたダルハトの1人がチャクーをうけとって供卓のうえにおく。すると、チョロンバートルが肩に儀礼用の絹布をかけて「オーオー」と叫びながら供卓に近づいていく。絹布をチャクー内の酒につけてから祭殿の方へ振りまく。そしてチャクーを肩に載せてグルジャブの側にもどる。これを「チャクーをもどす」(čaγu qariγulqu) という。この日は1人の参拝者が9回献酒した。そのあいだ「天の歌」はずっと響いていた。

7) 恩賜の配分

儀礼が終わってから、チャクーからもどされた酒と丸煮は参拝者全員に分配された。これはチンギス・ハーンからの「尊い恩賜」である。

5.5.2 3月20日の祭祀

「春季大祭」の前日、3月20日には参拝者がいちだんと増えた。年配のダルハトたちは参拝者の受けつけをし、若いダルハトたちは朝から丸煮の煮炊きをしていた。

ジノンをつとめるエルデニオチル (Erdenivačir 漢語名奇包賢 1992 当時 67 才) は正午に到着した。ダルハトたちはさっそく祭祀の準備状況をジノンに詳しく報告した。

夕方 5 時から、チンギス・ハーン一族の祖先祭、ガリル祭 (γaril-un tayilγ-a) がはじまった⁴³。この日の儀礼も 3 月 18 日のと同じくやはり儀礼用絹布と灯明の献上からはじまる。前日と異なるのはすべてジノンの手でおこなわれることである。グケチン職のチョロンバートルは祈祷文を唱えた。

5 時 15 分ごろ、祈祷用のヒツジが祭殿内に連れこまれた。ヒツジはまもなく腹が開けられ、生きたままの状態で肝臓と胆嚢が出された。グルジャブはそれを絹布に包んですばやく祭殿の裏に入る。肝臓と胆嚢に記されたチンギス・ハーンからの啓示を読みとる占いである。グルジャブが占いをしているあいだ、他のダルハトは一般人の参拝を受つけていた。その度に儀礼用の絹布と灯明が献上される。

つづいてジノンを中心とする「炉をあぶる」儀礼がはじまり、時刻はすでに 5 時 50 分になろうとしていた。丸煮にナイフとフォークを刺す。これが多分「祭祀の順次」に書いてあった「フォークを献上する」儀礼であろう。ダルハトと参拝者たちは丸煮から切りとった肉片を香炉のなかに入れる。グルジャブは酒を炉に振りまいた。

6 時 7 分ごろからジノンが「マンライラホ」儀礼をはじめた。グルジャブは 3 月 18 日の同じように「天の歌」をうたう。その息子はあいかわらず熱心に習っていた。

夜の 8 時 31 分に、ダルハトたちはガリル祭に出かけることになった。八白宮の東北にある「ガリルの盆地」で供物を燃やす。元来、ガリル祭はチンギス・ハーンの末子トロイ・エジンのダルハトたちが主宰し、チンギス・ハーンの「五百戸の黄色いダルハト」は関わらないことになっていた。現在ではトロイ・エジンのダルハトが祭祀に参加できなくなっていることから、もっぱら八白宮の 8 人のダルハトが代行している。私も特別の許可を得て同行することになった。

供物トゥリシを燃やして八白宮へもどるときはすでに夜の 9 時半ころであった。もどるときは振り返ることをしないで、「天の歌」をうたいながら帰る。この際の「天の歌」はまた「ガリルの歌」ともいう。暗闇のなかで、私は「天の歌」を記録すること

⁴³ この祖先祭については、楊 (1997a) を参照されたい。

ができなかった。

3月21日の祭祀は、基本的に前日のと同じである。13時過ぎに「褐色の高きもの」という桶に入れてあった馬乳を振りまく儀礼がはじまった。その際、「金書」に収録されている「99頭の白いウマの乳の振りまき」という祝詞を、ダルハトの1人が読みあげた。そのとき、私はかれらの使用していた「金書」の内容を確認することができなかった。

陰暦3月24日は、本来なら八白宮がふたたび各旗の駐营地へもどる日である。かつては各旗旗王が率いる騎馬軍に守られてもどることになっていた。現在では、各旗へもどることはなくなった。それでも本来の儀礼は欠かせない。この日もまた先日と同じように、グルジャブが「天の歌」をうたった。

「天のことば」については、今後さらに検討をくわえたいが、ここで今現在の私の考えをまとめておきたい。モンゴル族など北アジア諸民族は、拝天思想を根幹とするシャマニズムの宇宙論を築きあげた。シャマニズムにおける天は、最高神的な存在である。「天のことば」は、いわば最高神のことばである。最高神のことばを口にすることができるのは、特権的な祭祀者集団ダルハドのみである。ダルハドたちは「天のことば」の代言人である。かれらは、最高神のことばをチンギス・ハーンに捧げることによって、チンギス・ハーン祭祀全体の位置づけが格段と高められたことになる。

6 「金書」の書写について

「金書」は、度々書写された。新たに書写する作業をトンガホ (tungyaqu)、シネテゲン・トンガホ (sinedken tungyaqu) という。「金書」を新たに書写することは、きわめて政治的な行為であった。長く使われて破損が進み、古くなったというのが書写の理由ではなく、ときの為政者が政治的な目的から書写を断行していた。

『黄金オルドの祭祀』の著者の1人、サインジャラガルはその後1990年に「金書」の書写に関する論文を『内蒙古社会科学』で発表している (Sayinjiryal 1990:138-141)。以下ではサインジャラガルの見解を紹介しながら、「金書」の書写について検討する。

サインジャラガルはまず、「金書」はチンギス・ハーン祭祀に関するもっとも詳細な指針的記録全集であると位置づけたうえ、みずから『黄金オルドの祭祀』を書くために調査をおこなった際に、オルドス・モンゴル族の長老たちから聞きとった伝承を記録している。それによると、「金書」はかつて「中原を支配した元朝最後の皇帝トゴ

ン・テムール・ハーンのとくに大都北京で、北元時代のアルタン・ハン（1508-1582）の宮帳オールドでそれぞれ書写された。清朝の康熙3（1664）年と康熙61（1722）年に書写した。オールドスのジュンガル旗旗王がイケ・ジョー盟盟長をつとめていたときにも書写した」、という（Sayinjiryal 1990:138）。

そのうち、いわゆる「トゴン・テムール・ハーンによる書写」について、サインジャラガルは否定的な態度を示している。トゴン・テムール・ハーンは1333年から1370年のあいだに在位し、1368年に大都北京を追われている。サインジャラガルは、元朝のフビライ・セチェン・ハーンが編纂したとされている『十善白史』のなかにみられる「黄色い書」（Sir-a Bičig）を「金書」に想定している。そのため、「金書」は『十善白史』より古いとの見解にもとづき、トゴン・テムール・ハーン以前に書きあらためられたのであろうと主張している（Sayinjiryal 1990:138）。サインジャラガルは、いかなる性質の「金書」を分析材料とし、またどんな資料を根拠としているのか、まったく明示していない。そのため、以下では、本研究であつかった2種の「金書」のなかにある書写に関する記録を基本情報とする。

6.1 ボショクト・ジノンによる書写

ウランバートル本「金書」の【八十九】頁7行から【九十】頁1行にかけて、つぎのような内容がある。

- 7: Büküi degedü tngri-yin Altan Bičig-i Boγda ejen-ü egüdügšen
あまねく上天の「金書」を聖主の創造した
- 8: Takil-un yosun-iyar Bosuγ-tu jinung altan-iyar bičigülbei.
祭祀の礼法にてボショクト・ジノンが金で書かせた
- 9: Bögesütü terigün-i minu esen bolγaqui tngri minu.
ゆえにわが首領を安寧させる天よ
- 10: Ejen yügen jarliγ-iyar Qulači tayiji. Erildün kedün jokiyaγu bičiged.
主君たるの勅令にてホラチ・タイジ（人名？）らが創作して書き
- 11: Erketü boγda-yin suu-tu sitüjü. Edüi tedüi-ken sudur bolγaju
崇高なる聖主の英明を尊び、微小の書物となして
- 1: Üjegülbei::
完成させた。

ここではまず、「金で書かせた」主人公はボショクト・ジノンであることが明確に記されている。つぎに実際に書写の作業を命じられたと思われる人物は、ホラチ・タイジであることも疑いの余地がない。

ボショクトがいかなる背景のもと、いつジノンになったかについて、『蒙古源流』に詳しい記録がある。それはつぎのようなものである⁴⁴ (Mostaert part2 1956:206; part3 1956:185-186; part4 1956:201)。

ホトクタイ・セチェン・ホン・タイジ曰く、父これ家宅で昇天し、子これ野外で敵に害された。いま八白宮に祭祀（の主宰者）がないのは災難である、といって丑年生まれのボショクト・ジノンが13才になったのを丙子年にジノンとして即位させた（……Qutuγtai Sečen Qung Tayiji ende jarliγ bolurun.ečige inü gerde aγsaγar tngri bolun köbegün inü keger-e dayisun-a qoruγaγdaγu.Edüge Naiman Čayan Ger takil ügei anu berke bolai kemeged.Bosuγ-tü jinung-i üker jil-tei arban γurban nasutai-yi bing qoluγan-a jil jinung saγulγan……以下略）。

この記録から、ボショクト・ジノンは、1565年（丑）年に生まれ、1576年（丙子）に13才でジノンになったことがわかる。和田の研究によると、ボショクトの祖父ノヤンダラ・ジノンは1572年に死去している。ノヤンダラ・ジノンの子ブヤン・バートル・タイジもオイラト遠征中に戦死する（和田 1959:734-735）。これがホトクタイ・セチェン・ホン・タイジのいう「父これ家宅で昇天し、子これ野外で敵に害された」ことである。すでに触れたように、ジノンは八白宮の最高監督である。そのためホトクタイ・セチェン・ホン・タイジは、八白宮に主宰者のいないこと、すなわちジノンの空位を災難とみていた。ボショクトのジノン即位には、オルドス・モンゴル部の実力者ホトクタイ・セチェン・ホン・タイジの積極的な支持があったのである。

ボショクトがジノンになった1576年すなわち丙子年はとくに注目すべき年である。ときの全モンゴルの大ハーンはトゥメン・ジャサクト・ハーン（在位1558-1592）であった。『蒙古源流』にはつぎのような記録がある⁴⁵ (Mostaert part2 1956:187; part3 1956:166; part4 1956:183)。

⁴⁴モスタールトが収集した3種の『蒙古源流』のボショクト・ジノンの即位に関する記事には、それぞれ字句上の相違がある。ここではpart4を利用した。

⁴⁵転写にあたっては、part3を利用した。

丙子年（中略）6つの万戸集団を召集し、大政令を伝示し、左翼からチャハル万戸のノムタイ・ホン・タイジとハルハ万戸のウイジン・ソバハイ、右翼からオルドス万戸のホトクタイ・セチェン・ホン・タイジとアスウト（部）のノムダラ・ホラチ・ノヤン、トゥメト（万戸）のチュルク・ホン・タイジらを執政せしめ（以下略）(ulaγan qoluγan-a jil……jirγuyan tümen-i čuγlaγulun.yeke čaγaγi-yi etegeged jegün tümen-eče Čaqar-un Nomutai Qung Tayiji.Qalq-a-yin Üičing Subaqai baraγun tümen-eče Ordus-un Qutuγ-tai Sečen Qung tayiji Asud-un Nomdar-a Qulači noyan Tümed-ün Čörüge Qung Tayiji eden-iyer jasaγ-yi bariγulju.……)

トゥメン・ジャサクト・ハーンは、大政令を配布するなど、法規制定に熱心であったため、「ジャサクト」すなわち「法規を有する」ハーンとの称号が広まった（Čoyiji 1984:98）。当時、トゥメト万戸のアルタン・ハンが実力を発揮していたから、和田はこれら5人の執政が同時に任命されたかどうに疑問を抱いているようである（和田 1959:551-553）。サインジャラガルもオルドス万戸のボショクト・ジノンがアルタン・ハンの宮帳オルド内で、トゥメト万戸のアスウト・オトク（Asud Otorγ）出身のホラチ・タイジ（Qulači Tayiji）に書きうつせた、と推察している。この書写以来、オルドスには「アルタン・ハンの宮帳オルドで書写した」との伝承が広まったのであろうという（Sayinjirγal 1990:139）。

私は、トゥメト万戸のアルタン・ハンの宮帳オルドで書写したという説は成立しないとみている。アルタン・ハンは当時の実力者であったとはいえ、正統性はあくまでも大ハーンすなわちトゥメン・ジャサクト・ハーンにあった。ことにチンギス・ハーンの八白宮祭祀については、アルタン・ハンは発言力をもてないはずである。

トゥメン・ジャサクト・ハーンが左右両翼6大万戸集団を召集し、ホトクタイ・セチェン・ホン・タイジやホラチ・タイジらを執政に任命した丙子年と、ボショクトがホトクタイ・セチェン・ホン・タイジの支持でジノン即位を実現させた丙子年とは、みごとに一致している。さらに、ボショクトをジノンに即位させようとしたのは、ホトクタイ・セチェン・ホン・タイジであり、「金書」を書写したのは、ホラチ・タイジである。ジノン即位と「金書」書写にトゥメン・ジャサクト・ハーンの2人の執政が関わっている点も無視できないであろう。

モンゴルの大ハーンは即位のときあるいは即位後に八白宮に参拝し、正統性を誇示

しなければならない。おそらくこの丙子年に、トゥメン・ジャサクト・ハーンはみずからの正統性を全モンゴルに示すため、6大万戸集団を召集し、右翼の長であり、八白宮祭祀の最高監督としてのジノンをも任命したのであろう。そして新たに任命した執政の1人、アスウト部のホラチ・タイジに勅命で「金書」の書写を担当させたのである。このときの「金書」の書写は、トゥメン・ジャサクト・ハーンの正統性確立と、ホトクタイ・セチェン・ホン・タイジ、ホラチ・タイジら執政たちの活躍が背後にあった、というのが私の仮説である。

6.2 リンチン・ジノンによる書写

ウランバートル本「金書」【百八】頁6行から8行にかけて、「金書」の書写に関する別の内容がある。

6: Ke noqai jil-ün jun-u ekin sarada.arban jirγuyan-a tegüs edür

庚戌年夏の最初の月、16日の吉日に

7: Rinčin jünung ejen qatun-i Altan Debteri sinedken tungγuba::

リンチン・ジノンがエジン・ガトンの「金冊」を新しく書写した。

8: Nasun qutuγ nemetügei::

長寿福祿増えるよう。

リンチン・ジノンは、1600年に生まれ、1627年にジノンの位につき、1657年に死去している。サインジャラガルは、リンチンが11才のときすなわち1610年は「庚戌年」にあたるが、このときリンチンはまだジノンになっていない。当然、「金書」の書写に関わることはできない。そのため、サインジャラガルは「金書」の「長寿福祿が増えるよう」との表現に注目し、「庚戌年」を1670年に想定している。1670年は、リンチン・ジノンの死後13周忌にあたる (Sayinjirγal 1990:139)。「13」を聖数とみなすモンゴルでは、これにちなんでなんらかの法事を営み、長寿福祿をねがうのも不思議ではない。

1670年は清朝康熙9年である。サインジャラガルは、オルドスの民間伝承にある「康熙3年の書写」とは、本来はおそらく「康熙9年」のことを指していたのではないかとみている (Sayinjirγal 1990:139)。

6.3 康熙61年の書写

本研究であつかったオーノス本「金書」の最後【五十四】頁3、4行にはつぎのようなことばがある。

- 3: dayičing ulus-un Engke Amuγulang-un jiran nignedüger on-u namur-un terigün sar-a

大清国康熙61年秋の最初の月（陰暦7）に

- 4: Činggis boγda-yin Altan Bičig-i sinedken tungγaba:
チンギス・ボクドの「金書」を新たに書写した。

康熙61年は西暦1722年である。この「金書」には、書写した年月を記しただけで、書写の目的とそれに関わった人物などは不明である。

この「金書」は、上述のボショクト・ジノンとリンチン・ジノンが書写した「金書」よりも後世に書き改められている。しかし、内容的にはボショクト・ジノンとリンチン・ジノンが書写した「金書」より古い時代の特徴を帯びている。たとえば、八白宮の四季大祭に関しては、リンチン・ジノンの書写した「金書」はただオルドス万戸だけの義務について言及している（ウランバートル本【百】11～【百八】5）。これに対して、康熙61年に書写した「金書」（【五十一】1～【五十三】5）では、オルドス万戸のほかに、さらにチャハル万戸、ウリヤンハイ万戸など、北元時代の全モンゴル左右両翼6つの万戸集団のそれぞれの義務、ハーンやジノン、万戸長、千戸長の義務まで詳しく記録している。

サインジャラガルは、この「金書」は北元のあるハーンが在位中に書写したものであろうとみている（Sayinjiryal 1990:140）。

6.4 ジャミヤン・ジノンによる書写

ふたたびウランバートル本「金書」をとりあげたい。同「金書」の【九十】頁1行目から【九十一】頁1行目にかけてつぎのような内容がある。

- 1: Qamuγ-un degedü tngri-yin Altan sačuli
最上天の「黄金の振りまき」（と）
- 2: Qaγan ejen-ü egüdügšen takil-un yosun-i qoyar jüil
ハーン・エジンの創造した「祭祀の礼法」の2種類の
- 3: Altan Bičig qaγučiraγsan-u tula.qan aγul ači ür-e inu

「金書」が古くなったため、ハーンの子孫である

- 4: Ordus tümen-ü oki jinung da vang Jamyān sinedken altan-iyar
オルドス万户のオキ・ジノン、盟長で旗王ジャミヤンが新しく金で
- 5: Tungγan bičigülbei::
書きうつせた。
- 6: Qan ür-e yügen engke esen bolγaqui tngri minu.
ハーンの子孫たるものを平安にさせるよう天よ
- 7: Erketü ejen-iyen jarliγ-iyar tusalan bütüegsen tusatu qonjin
崇高な主君の勅令にて尽力して完成させたトサト・ホンジン（職）で
- 8: Vayidan-i-da tabunung Sirab.ačitu qonjin kiy-a Jamsu.
パイタンダーでタブナンであるシャラブ、アチト・ホンジン（職）でカーであるジャムソ
- 9: Joriγtu Čolu Bayatur Üngseng gesül-ten erten-ü bayiγuluγsan
ジョリクト、チョロ・バートル（人名？）らいにしえの定めた
- 10: Jirum-i daγaju. endegürel ügeküγ-e kičiyen jidküjü. emün-e-ün
法規にしたがい、過失ないように慎んで全力を尽くした。御前
- 11: Ejen boγda-yin suu-tu sitüjü bičiged.qaraγčin γaqai jil-un
主君の英明を尊び書いた。癸亥年
- 12: Ebül-ün terigün sar-a-yin sin-e-yin γurban-a tasman-u delgerenggüi
冬の最初の月の3日タスマ（という）輝かしい
- 1: Yeke qurim-un edür tungγan bütügebei::
大祭の日に新たに完成させた。

この文面は、祭祀において馬乳を振りまく際に使用される「黄金の振りまき」と称する「金書」と、「祭祀の礼法」といった2種類の「金書」があったことを示している。前者は、もっぱら各種の祝詞や祈祷を収録したもので、後者は祭祀の指針的内容が中心であったと推定できる。

文面ではこの2種類の「金書」が「古くなったため」、ジノンをつとめていたジャミヤン王が新しく書かせたことになっている。ジャミヤンは、ジュンワン旗の旗王であった。1698（康熙37）年に生まれ、1728（雍正6）年に郡王の位につき、1757（乾隆22）年に死去している（Sayinjirγal 1990:141; Van Hecken 1972:150）。この期間中の癸亥年とは、1743（乾隆8）年のことである。

ジャミヤン・ジノンのほか、書写に関わった祭祀者ダルハトの名前が確認できる。

6.5 ジャナガルディ・ジノンによる書写

サインジャラガルは最後にジュンガル旗の档案資料にもとづいて、ジュンガル旗旗王が盟長をつとめていたところの書写について述べている。それは、ジュンガル旗旗王でベーラ爵のジャナガルディ (Janaγarudi) が1884年から1901年のあいだ、ジノンを担当していたころのことであるという (Sayinjirγal 1990:141)。

サインジャラガルはここで興味深い情報を示している。オルドス地域ジャサク旗旗王シャグドルジャブの宮殿オルドに、1892 (光緒18) 年に書写した「金書」があったという (Sayinjirγal 1990:141)。ジャサク旗旗王シャグドルジャブは、ジュンガル旗旗王ジャナガルディと特別な関係にあった。具体的には、ジャサク旗旗王シャグドルジャブを幼少のときから育てあげた女性は、ジュンガル旗王ジャナガルディの親類の者であった。そのため、のちにシャグドルジャブが1897 (光緒23) 年に旗王の座につく際、盟長ジャナガルディ・ジノンは助力を惜しまなかった。それ以降、ジャサク旗とジュンガル旗との往来も頻繁で、さまざまな交流があった。サインジャラガルは、ジャサク旗旗王シャグドルジャブの宮殿オルド内に保存してあった光緒18年の「金書」は、ジュンガル旗旗王が書写した「金書」であるという (Sayinjirγal 1990:141)。

ここでもう一度リンチンが1957年にオルドス地域から収集した文書をふりかえってみよう。リンチンが収集した文書には「ジャサク旗の冊子」があった (Rintchen 1959b:102)。もしかすると、「ジャサク旗の冊子」もジュンガル旗王ジャナガルディ・ジノンが書写した「金書」と関連するかもしれない。

以上、「金書」の書写について、主として本研究であつかった2種の「金書」にある情報を根本資料に、『蒙古源流』とあわせ、サインジャラガルの論文を参考にして整理してみた⁴⁶。サインジャラガルはまた、このほかにもオイラト・モンゴルのエセン・ハー

⁴⁶ ジャムツァラーノは、オルドスからなん種類もの「金書」を収集していると思われる。後日リンチンが整理、公表したテキストを検討したところ、第xxxx番目は、ボショクト・ジノンとジャミヤン王の「金書」に言及している。第xxxix番目は、リンチン・ジノンの書写を示している (Rintchen 1959b:87;93)。ディリコフが1956年にオルドスを訪れたときに書きうつした文書に、ボショクト・ジノンとジャミヤン王の名前が確認できる (Дылыков 1958:266-268)。リンチンみずから収集した文書のなかで、第xLvi番目の文書の最後に「ジャサク旗の (祭祀用?) 冊子」ということばがある (Rintchen 1959:102)。また、第xxxix番には「イケ・ジョー (盟) オトク旗の祭祀用冊子」とある (Rintchen 1959:97)。この2つの冊子は、いわば八白宮以外の祭殿に関する「金書」であろう。モスタールトが1909年12月11日にジュンガル旗から書きうつした「ボクドの祝詞・恩賜ヤムに関する礼法書」(Boγda-yin irügel-ün yamu yosu jang üile-yin debter) という文書 (Serruys 1982:141-147;1984:29-62) は、「金書」であるとみてさしつかえな

ン(1407-1453)が書写した「金書」、オルドスのウーシン旗旗王バダラホ(1829-1883)が書写した「金書」もある、との情報を記録している(Sayinjiryal 1990:141)。

6.6 書写作業における編纂

書写する作業のなかで、ある程度の編纂がおこなわれた可能性がある。その証拠をウランバートル本「金書」に求めることができる。

現存のかたちでいえば、ボショクト・ジノンによる書写に関する言及が【八十九】頁から【九十】頁にあるのに対して、リンチン・ジノンが書写したとの内容は【百八】頁にある。リンチン・ジノンよりも後世のジャミヤン・ジノンについては、【九十】頁にある。つまり、書写を担った歴代ジノンの偉業を時代順に並べていないのである。

もう1つの傍証をウランバートル本「金書」の第12番目の「ガリル祭の金書」(「ガリル祭の経文」)のなかからみつけることができる。「ガリル祭」は、チンギス・ハーン一族の祖先祭である。「ガリル祭の金書」に登場する人物は、末子トロイ・エジンより捧げられた供物を享受する歴代祖先たちである(楊 1997:635-708)。ウランバートル本「金書」内の「ガリル祭の金書」にある一番最後の人物、つまりもっとも新しく「あの世」に渡った者は、オルドスのジュンワン旗の旗王ラシバンジュール郡王(Rasibanjuur Törü-yin giyön vang)である(【八十三】9)。ラシバンジュールは、1720年に郡王の位に即き、1728年に死去する。死後はその甥のジャミヤンが旗王になる(Van Hecken 1972:150)。したがって、少なくとも「ガリル祭の金書」は、ラシバンジュール王以降において、おそらくジャミヤン・ジノンの治世中に書かれたと判断できよう。時代順になっていないのは、なんらかの政治的意図によるものであろうか。

7 歴史への回帰と展望

「金書」には、チンギス・ハーン祭祀に関する義務、法規、祈祷文など豊富な内容が収録されていることはすでに述べてきたとおりである。「金書」はチンギス・ハーン祭祀史であり、年代記はチンギス・ハーン一族の王統史である。

チンギス・ハーン祭祀の核心である「金書」の書写を継承してきたのは、チンギス・ハーンの直系子孫である。北元時代の大ハーンやジノンは、八白宮の御前で即位し、あ

らう。この文書の奥付には、宣統元(1909)年冬の最初の月(陰暦10月)29日という記しがある。おそらくこれは、ジュンガル旗旗王ジャナガルディ・ジノンが書写した「金書」を再度写したものであろう。

るいは即位後に参拝し、同時に「金書」の書写をおこなったと推定できよう。「金書」を書写した際には、当然「金書」にその名が記録される。かれらは、それによって「チンギス・ハーンの認知」を獲得した。

著名な年代記の編纂者の大半は、チンギス・ハーンの直系子孫である。「金書」の書写と年代記の執筆をになったのはいずれもチンギス・ハーンの直系子孫である。その代表的な人物として、近世オルドス地域ウーシン旗のバダラホ王をあげることができる。

バダラホ王は、1829年に旗王の位を受けつぎ、まもなくイケ・ジョー盟の副盟長、ジノンになる。1854年には盟長に昇進しひきつづきジノンをつとめる。バダラホ・ジノンは、副盟長のときから、なん種類もの年代記の執筆を命じているものの、現代に伝わっているのは『ゲゲン・トリ』と『スウバート・エリケ』のみである(Narasun & Öljeibayar 1986:260-264)。その年代記の執筆に、チンギス・ハーンの祭殿を維持する祭祀者ダルハトたちも関わっていることを、年代記自身が語っている(Sonom 1995:229-230)。

バダラホ・ジノンが書写した「金書」は発見されていないが、年代記の編纂に熱心であり、民間でもバダラホ・ジノンが「金書」を書写したと伝承されている。チンギス・ハーンの直系子孫にとって、「金書」を書写することと、年代記を編纂することとは、同等な価値があったに違いない。

「金書」の記述内容には、『モンゴル秘史』と類似した表現が多い。「金書」に登場する人物名は、年代記のそれと一致する。「金書」を創作した際に、何を根本資料としたのか、背後に隠された史籍の探究を今後の課題としたい。

文 献

Aubin, F.

- 1972 Nécrologie — le Père Aontoine Mostaert. *T'oung Pao* (通報), Vol. LVIII, Leiden, Netherlands. 218-220.

Chiodo, E.

- 1989/91 “The Book of the Offerings to the Holy Činggis Qaγan” A Mongolian Ritual Text, *Zentralasiatische Studien*, 22, Wiesbaden, 190-220.
- 1993 “The Book of the Offerings to the Holy Činggis Qaγan” A Mongolian Ritual Text (part 2), *Zentralasiatische Studien*, 23, Wiesbaden, 84-144.
- 1994 History and Legend: The Nine Paladins of Činggis (Yisün Örlüg) According to the “Great Prayer” (Yeke Öčig), *Ural-Altaische Jahrbücher*, 13, Harrassowitz Verlag, 175-225.

Čoyiji

- 1984 *Γangy-a-yin Urusqal* (モンゴル文: 『恒河之流』). 呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

Damdinsürüng, Č.

- 1982 *Mongγol Uran Jokiya-un Degeji Jaγun Bilig Orusibai* (モンゴル文 『モンゴル古代文学百篇』 1). 呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

Дылыков, С.

- 1958 Эджен-Хоро. Филология и История Монгольских Народов, Москва.

Eldengtei & Ardajab

- 1986 *Mongγol-un Niγuča Tobčiya-n Seyiregölül Tayilburi* (モンゴル文: 『モンゴル秘史還原注釈』). 呼和浩特: 内蒙古教育出版社.

Erkesečen

- 1991 *Altan Sülda-yin Tayily-a* (モンゴル文: 『黄金スウルデの祭祀』). 『烏審旗文史資料』 15, 政協烏審旗文史委整理.

Gombojab, H

- 1975 In Commemoration of the Seventieth Anniversary of Academician Professor Doctor Yüngsiyebü Rinchen, *Mongolian Studies*, Vol. 2, Indiana University, 7-24.

İşijamsu

- 1992 Činggis Qaγan-u Yeke Ejen Qoruyan-du Baralqaγsan Mini (モンゴル文:「チンギス・ハーンの大エジン・ホローに参拝して」).『内蒙古社会科学』(蒙文版) 4:24-29.

Kürelbaγatur

- 1987 Činggis Qaγan-u Öcüg Takil Üiledküi Yosun Üiles Türgen-e Bütügči Kemegdekü Orusibai (モンゴル文:「チンギス・ハーンの祭史ウチュクを営む礼法が速やかに成就する者たる(書)」. *Ordus-un Soyul-un Öb* (『オルドス文化遺産』2) .

Liu Jinsuo (整理注釈)

- 1981 *Arban Buyantu Nom-un Čaγan Teüke* (モンゴル文:『十善福白史冊』). 呼和浩特:内蒙古人民出版社。

Masijirγal

- 1990 Čargi-yin “Arban Qoyar Daγun” -u Tuqai Angqan-u Ajiγalta (モンゴル文:「チャルキの12の歌に関する初歩的考察」).『内蒙古社会科学』(蒙文版) 2:119-122.

Mostaert,A.

- 1942 *Dictionnaire Ordos* (J-Ž), The Catholic University Peking.
1956 *Erdeni-yin Tobči*, Mongolian Chronicle by Saγang Sečen. Part 2,3,4, Harvard-Yenching Institute Scripta Mongolica 2, Cambridge, Mass: Harvard University Press.

Načaγdorj

- 1968 *To Van Tüünii Surγaal* (モンゴル文:『ト・ワン及びその教諭』). Monumenta Historica Instituti Historiae Academiae Scientiarum Reipublicae Mongoli, Tomus V, Ulaanbaatar.

Narasun & Öljeiyibayar

- 1986 *Ordus-un Jokiya Bötügel-ün Tegübüri* (モンゴル文:「オルドス・モンゴル族の作品選」). *Yeke Juu-yin Soyul Teüke-yin Materiya* (『伊克昭文史資料』) 1:178-295.

Narasun & Erdemtü

- 1987 *Činggis Qaγan-u Naiman Čaγan Ordun* (モンゴル文:『成吉思汗八白室』) 第七輯. 内蒙古伊克昭盟档案館。

Na Ta

1991 *Altan Erike* (モンゴル文:『金鬘』). 呼和浩特:内蒙古人民出版社.

『内蒙古大辞典』編纂委員会

1991 『内蒙古大辞典』. 呼和浩特:内蒙古人民出版社.

Poppe, N.

1971 Antoine Mostaert, C.I.C.M. *Central Asiatic Journal*, Vol. XV(3),
Wiesbaden, 164-169.

Qurčabaγatur, S.

1993 Divinations with the Liver of the Sheep Among the Ordos Mongols. *Contribution to the International on "A. Mostaert and His Ordos Study"*, Leuven, 1-10.

Qurča(bilig), Na.

1988 Dörben Čaγ-un Qurim-un Alba Kiged Tegün-ü Neyikem Aju Aquiyin Saγuri (モンゴル文:「四季大祭の義務及びその社会経済的基礎」). 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 4:107-119.

1990 Esi Qatun Qoruy-a Kiged Tegün-ü Egüsül Ularilta (モンゴル文:「イシ・ガトン・ホローの起源と変遷」). 『蒙古学研究』 4:71-78.

1992a Esi Qatun Sitügen Kiged Tegün-ü Takilγ-a-yin Učir (モンゴル文:「守護神イシ・ガトン及びその祭祀状況」). 『内蒙古社会科学』 1:91-100.

1992b Esi Qatun-u Ner-e-yin Tuqai (モンゴル文:「イシ・ガトンの名前について」). 『昭烏達蒙古族師範專科学学校学报』 2:22-24.

1993 Yamu Kedeg Üge-yi Yaγakiju Oyilaγabal Jökiq Bui (モンゴル文:「ヤムということばを如何に理解すべきか」). 『蒙古語文』 2:62-64.

1994 Erten-ü Mongγol-un Yamu Tügegekü Yosun-u Tuqai Angqan-u Sudulul (モンゴル文:「古代モンゴルのヤム分配についての初歩的考察」). 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 3:40-47.

Rintchen, Y.

- 1959a Zum Kult Tsinggis-Khans Bei Den Mongolen. *Opuscula Ethnologica Memoriae Ludovici Biro Sacra*, Budapest, 9-22.
- 1959b *Les Matériaux pour L'Étude du Chamanisme Mongol*, Wiesbaden.
- 1979 *Monᠭol Ard Ulsin Uᠭsaatni Sudlal, Khelnii Šinᠵlelün Atlas* (モンゴル文:『モンゴル人民共和国民族学研究・言語研究地図』), Ulaanbaatar.
- 1990 Šinᠵlekh Ukhaani Akademiin Jinkhene Gišüün, Khel Šinᠵleliin Ukhaani Doktor, Professor Rinčen Minii Furvan Üyiin Tüükh (モンゴル文:「科学研究アカデミー成員言語学博士リンチン教授 我が三代の歴史」), *Bilgüün Nomč Byambin Rinčen*, Monᠭol Uran Zokhiol Khevreliin Fazar, Ulaanbaatar.

Sayinᠵiryal & Saraldai

- 1983 *Altan Ordun-u Tayily-a* (モンゴル文:『黄金オルドの祭祀』). 北京:民族出版社。

Sayinᠵiryal

- 1990 “Altan Bičig” -un Kedünte Tungᠭaᠭdaᠭsan Bayidal (モンゴル文:「金書の書写について」). 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 2:138-141.

Serruys, H.

- 1970 A Mongol Prayer to the Spirit of Činggis-Qan's Flag. *Mongolian Studies*, XIV, Budapest, 527-535.
- 1975 A Catalogue of Mongol Manuscripts From Ordos. *Journal of the American Oriental Society*, Vol.95, Columbia University, 191-208.
- 1982 A *dalaly-a* Invocation From Ordos. *Zentralasiatische Studien*, 16, Wiesbaden, 141-147.
- 1984 The Cult of Činggis-Qan: A Mongol Manuscript From Ordos. *Zentralasiatische Studien*, 17, Wiesbaden, 29-62.

Somom

- 1995 *Gegen Toli · Ordus-un Tuqai Temdeglel* (モンゴル文:『明鏡 オルドス記』). 北京:民族出版社。

田中克彦

- 1990 『草原の革命家たち』. 東京:中央公論社。

利光有紀

- 1989 「ヒツジに託す願いーモンゴル族, 春のチンギス・ハーン祭典」『季刊民族学』48:36-46。

Van Hecken, J.L.

- 1972 Les Princes Borjigia des Ordos Depuis Leur Soumission aux Mandchoux en 1635 Jusqu'a Leur Disparation en 1951. *Central Asiatic Journal*, Vol. XVI, Wiesbaden, 132-155.

和田 清

- 1959 『東亜史研究』(蒙古篇) 東京:東洋文庫。

楊 海英

- 1995 「チンギス・ハーン祭祀の政治構造」『内陸アジア史研究』10:27-54。
 1996 「オルドス・モンゴル族オーノス部の家系譜」『関西外国語大学研究論集』63:667-679。
 1997a 「オルドス・モンゴル族の祖先祭祀ー末子トロイ・エジン祭祀と八白宮の関連を中心に」『国立民族学博物館研究報告』21 (3) :635-708。
 1997b 「チンギス・ハーンとその子孫たちー世界帝国の英主から〈中華民族の英雄〉へ」『茨城県立歴史館報』24:1-13。
 1998 「モンゴルにおける白い幡の継承と祭祀」『国立民族学博物館研究報告』(印刷中)。

Žamcarano

- 1955 *The Mongol Chronicles of the Seventeenth Century*, Wiesbaden.

Ж а м ц а р а н о

- 1961 К у л ь т Ч и н г и с а в О р д о с е : И з П у т е ш е с т в и я в Ю ж н у ю М о н г о л и ю в 1910 г. *Central Asiatic Journal*, Vol. VI, Wiesbaden, 194-234.

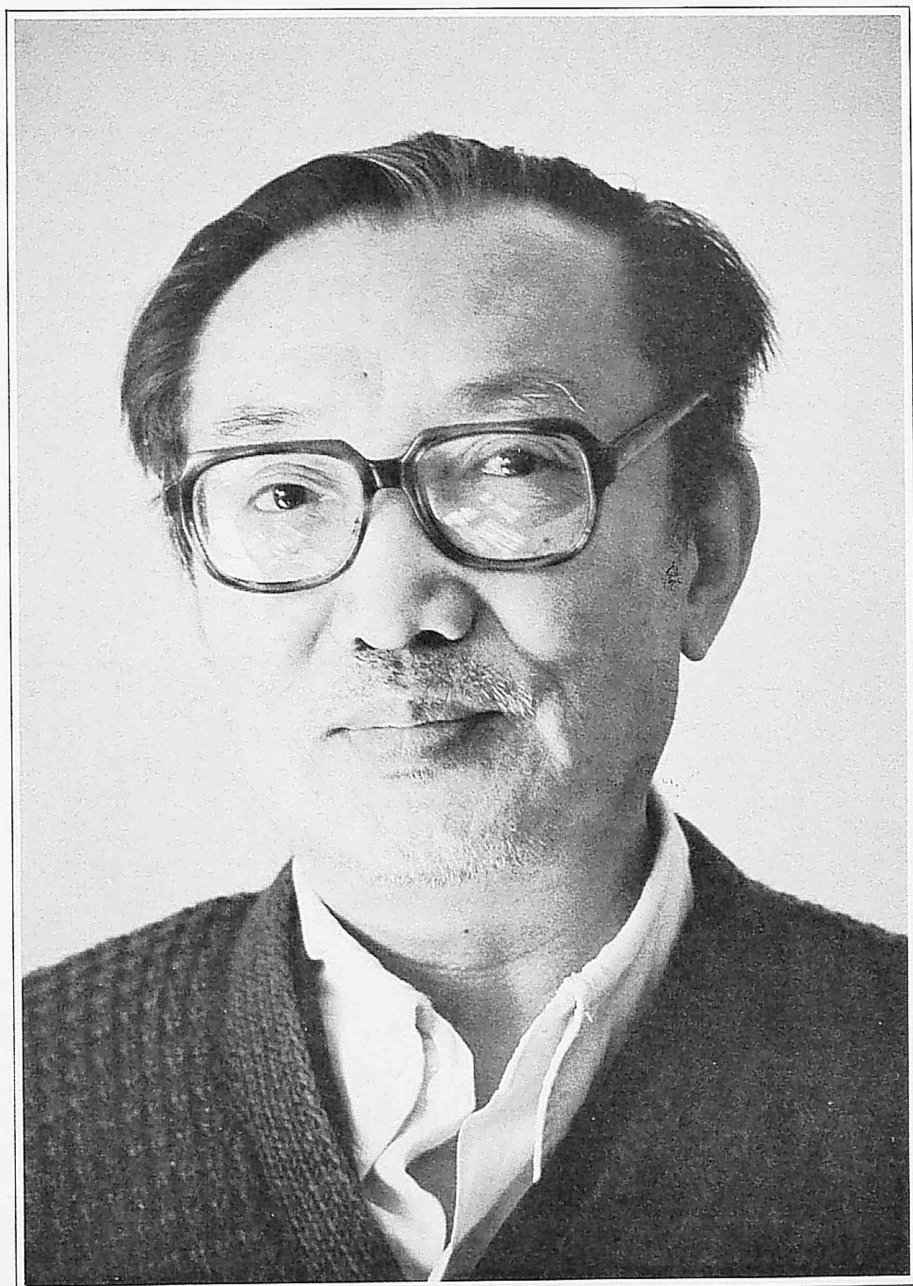


写真1 「金書」の提供者オーノス

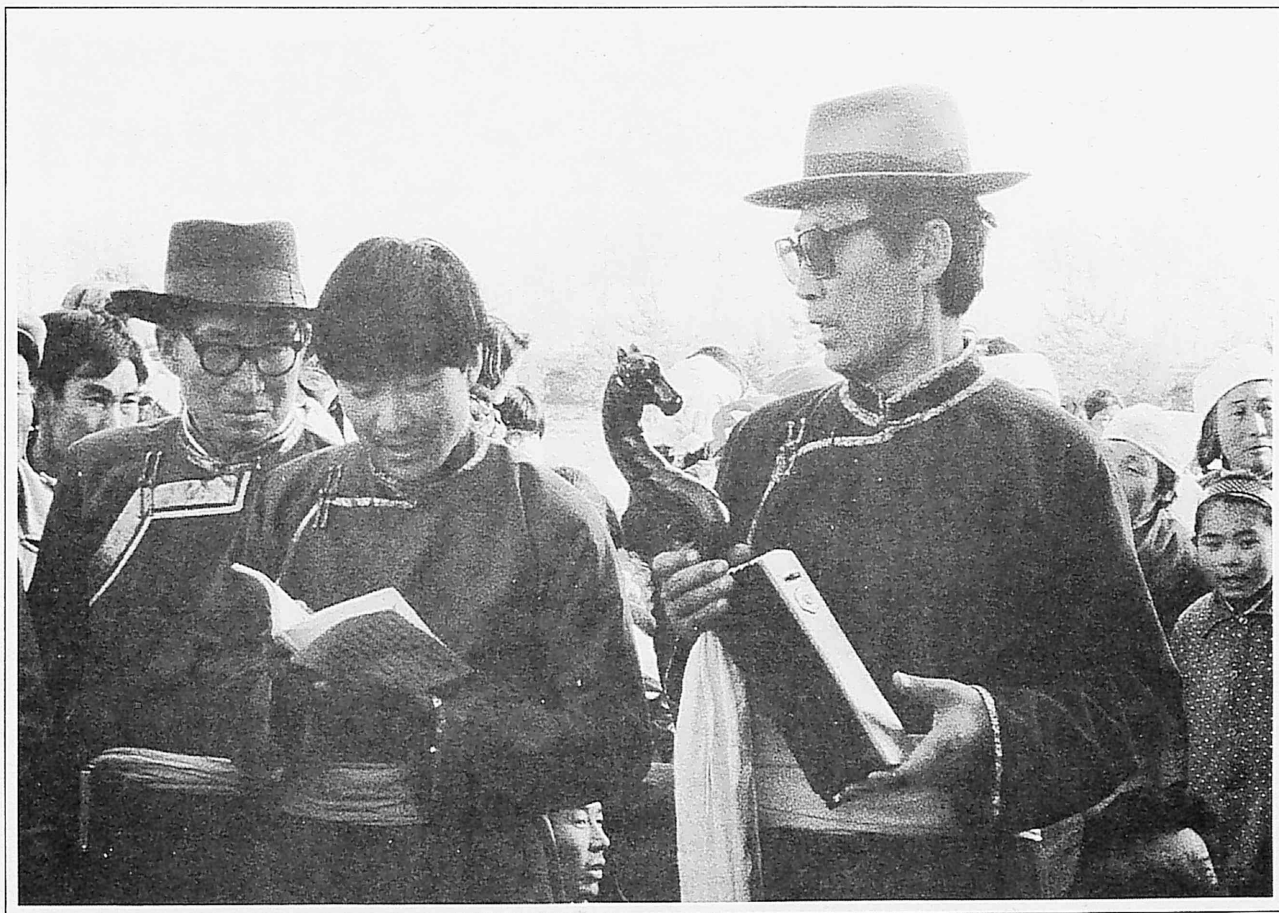


写真2 「天のことばによる歌」をうたう祭祀者ダルハト